朝鮮戦争

回答のない質問

博士　林昌永

元国連駐在韓国大使

1960—1961

朝鮮・平壌

1993

朝鮮戦争開始42周年に際して

1992年6月25日

朝鮮・平壌

外国文出版社

1993

著者　フィリップ・ジャイソン

著者の他の著書

フィリップ・ジャイソン『最初の朝鮮系米国人
忘れられた英雄』

フィリップ・ジャイソン記念財団

1984 年度著作権　ＰＡ．19117

エルキンズ・パーク郵便函 11273

国会図書館目録番号 160－528

出版－奎章出版社

林昌永は、1909年、朝鮮の北部地方で生まれた。
1930 年に平壌崇実学校を卒業して米国に渡り、ラファエット大学に入学した。
そこで、李承晩、徐載弼らとともに、朝鮮独立偉業にたいする米国の支持を得るために活動した。
夫人であり同志でもある李ボベとの出会いがそこでなされた。
1934 年、ラファエット大学卒業後、ニューヨーク市の神学校に入学し、ニューヨーク市韓国教会の牧師を勤めた。
1941年プリンストン大学に入り、アルベルト・アインシュタイン、エドワード・コーウィンら自由派インテリと交わり、朝鮮解放へのかれらの支持を獲得した。
朝鮮が日本から解放された 1945 年に教授・博士号を授けられ、その後2年間、プリンストン大学で教鞭をとった。
1948 年、米軍政庁顧問兼ホッジ中将の責任顧問徐載弼の一等書記官として、南朝鮮に帰った。
朝鮮の分断に失望したかれは、その年再び米国に帰り、ピッツバーグのチャタム大学で教鞭をとり、李承晩の独裁に反対する海外運動をくりひろげた。
1960 年 4 月の学生抗争で李承晩が追放されたあと、張勉政府のもとで国連駐在大使を勤めた。
朴正熙の軍事クーデターの1年後、抗議の表示として大使を辞任した。
かれはニューヨーク州立大学で教鞭をとるかたわら、朴正熙政権への米国の支持を阻止する運動を指導した。
1970 年代初、かれは北朝鮮との和解のみが、朝鮮の独立と民主主義を確保する道であると確信するにいたった。
1974年、李ボベ夫人が北朝鮮を訪れ、1976年には、本人がはじめて北朝鮮を訪問した。
そうした過程でかれは、外部勢力の干渉なしに、平和的統一が達成できるという確信を固めた。
現在隠退中の林昌永教授夫婦はニューヨーク州に居住し、ひきつづき朝鮮の平和的統一をはかって文筆その他の活動をつづけている。

新朝鮮政策委員会デービット・イースター

目　　次

はじめに

本論文は、朝鮮戦争を先に起こしたのは誰か、という、やむことなくつづいている論争の解明を目的に執筆されたものである。
1950 年 6 月末、朝鮮の 38 度線地域で戦いがはじまった。西側とくに米国と南朝鮮では、戦争（1950～1953 年）がクレムリンの指示によって、北朝鮮が開始したと主張している。逆に中華人民共和国とともに北朝鮮は、米国の「手先」南朝鮮が戦争の火をつけたと主張している。論争はいまなおつづいている。

この数十年間、米国の発表した文書その他の資料を検討した西側の史家は、ワシントンとソウルの主張に挑戦しはじめた。かれらは、米国と南朝鮮にはなんの罪もなく、朝鮮戦争の責任はもっぱら北朝鮮とソ連にあると非難するのは正しくないとし、北朝鮮と中国の主張を裏づける確証が発見されていると指摘している。

ところで一部の学者からは、それは過ぎ去った出来事だから、不問に付しては、という意見が出されている。そのような見解が、長年戦争の根源を穿さくしつづけたあげくの疲労に由来するものなら、十分同情に価しよう。けれども、この問題が現実的に大した意義がないという判断にもとづいているのなら、それに同意するわけにはいかない。

朝鮮戦争はまだ終わっていない。ただ、不安定な停戦が破滅的な戦争の再発を防いでいるにすぎない。だから北と南の朝鮮人民は全交戦当局者に、1953 年の停戦協定を平和協定に変えることを要求

しているのである。

ヨーロッパにおける冷戦の終息と時を同じくして、平和的統一を求める朝鮮人民の力強い運動は実を結びはじめている。1991 年秋の北南朝鮮の国連加盟、南朝鮮からの米核兵器の撤収、1991 年 12 月 13 日の『北南間の和解と不可侵および協力、交流に関する合意書』の採択、そして、1992 年 1 月 30 日の『朝鮮半島の非核化に関する共同宣言』の発表は、それを明らかに実証している。しかし、統一への過程にはなおさまざまな障害が横たわっている。韓国政府は依然として「国家保安法」を適用し、民主化と平和統一を求める広範な運動を弾圧している。とりわけ、朝鮮半島において核兵器の査察問題は、非核化の実現に先だって、朝鮮民主主義人民共和国と米国のあいだで極めて鋭い問題として浮上している。朝鮮の恒久平和は従来に比べて展望が明るくなったとはいえ、なお前途は遼遠としているのである。

ところで、朝鮮における「戦争と平和」の問題は、決して政府によってのみ解決されるべき問題ではない。政策が効果をあげるには、全民族的なコンセンサスがなければならないのである。米国は朝鮮戦争後、「奇怪」「予測しがたい」「テロ的」などとかれらが広く喧伝してきた北朝鮮のイメージをもとに、朝鮮の分断維持に莫大な資金、資材を費やしてきた。こうした北朝鮮認識はもっぱら不透明な目的に利用され、史実が示しているように、それは米朝両人民に大きな宿弊を残した。

今日、南の朝鮮人は自国の歴史より米国のことにもっと詳しいという。恐ろしい試練をへて歴代の指導者の正体を見抜いたかれらはいま、憤り悲しんでいる。かれらは現職の指導者をひどく軽蔑して

おり、指導者たちもそれを十分にわきまえている。かれらは共産主義の北朝鮮を警戒しながらも、政府の反共宣伝には耳をかそうとせず、真実を知りたがっている。かれらは米国も信じていない。

ソウルの独裁者に肩を入れる米国が民主主義を声高に叫べば叫ぶほど、不信感はつのるばかりである。アメリカ人民はこのような状況の変化に応じて、朝鮮人民とともに朝鮮における冷戦の歴史を深刻に見直し、今日の朝鮮情勢を正しくとらえるべきである。

ここで一言ふれておきたいのは、社会主義がヨーロッパでより、アジア、とりわけ北朝鮮でいっそう活性化していることである。ベルリン障壁の崩壊と西ドイツによる東ドイツの吸収は、ヨーロッパにおける冷戦の終焉を象徴しているが、1991 年 12 月 13 日に北南朝鮮間で締結された合意書は、相互の社会制度の尊重をうたっている。民主化された東ヨーロッパと以前のソ連は米国をモデルにしようとしているが、「民主的」な南朝鮮では、反米主義がひきつづき高揚しているのである。

アジアにおける社会主義の長期の成功と失敗、同様に資本主義の成功と失敗については誰も予測できないが、社会主義が冷戦に耐え抜くであろうという見通しは否定できない。ところで、共産主義的な北と資本主義的な南のあいだの差異を乗りこえてより根本的で切実な平和的和解が成立し、一方または他方の滅亡をまねくことのない統一を実現する基礎が存在するのだろうか。数百万の朝鮮人は、存在すると信じている。単一民族として数千年間ともに生きてきたのは、かれらの共同の遺産である。しかし、「小さい悪魔の帝国」という北朝鮮にたいする冷戦時代のイメージが、米国の社会と指導者の心をとらえているかぎり、朝鮮民主主義人民共和国と米国、北

朝鮮と南朝鮮のあいだの平和的和解は果たせないであろう。

朝鮮戦争の始原にかんする慎重な見直しが、現在の米国の朝鮮認識がいかに不正確なものであるかを明らかにすることに役立つであろうと信じ、わたしは 20 年来の研究にもとづいて、この問題と関連したわたしの見解を公表することにした。

本論文を執筆するにあたって、わたしは、1940 年代初から今日にいたるまで朝鮮戦争で重要な役割を果たした人たち、またはそれと関連した人たちの文章や口頭の論評、記事を広く検討した。

かれらのなかで朝鮮戦争の遂行に直接関与した人たちは、つぎのとおりである。

駐韓米軍司令官ジョン・R・ホッジ中将、連合軍最高司令官・駐韓国連軍司令官ダグラス・マッカーサー将軍、元南朝鮮総理張勉、元米国務長官ジョン・フォスター・ダレス、李承晩大統領を代表して板門店停戦会談にオブザーバーとして出席した崔徳新、朝鮮光復軍老兵・在中国米国戦略サービス事務所の尹ヨンム、韓国改革運動指導者・元駐韓米陸軍司令部責任顧問徐載弼博士、韓国「3 大」指導者の一人金圭植、朝鮮臨時政府首班（1932～1945 年）金九、朝鮮戦争当時の韓国副大統領金性洙。朝鮮戦争の始原を調査した西側学者のなかで、著名なジャーナリスト・作家のストーン氏と朝鮮戦争問題専門家のブルース・カミングス氏は、りっぱな著作をされたばかりでなく、わたしに有益な話をしてくださった。諸氏に最大の感謝を捧げるものである。

わたしはまた、わたしの草稿を検討し、適切な助言を惜しまなかったラムセイ、ポール、ジョウンらわが子たちの多大な協力についても言及しておきたい。

また、それに劣らず、変わりなくわたしを励ましてくれた妻のボベにも謝意を表する。
　しかしながらわたしは、論文のすべての見解の責任は、いっさいわたしにあることを断っておきたい。

第１章　「最初の発射」の法的および歴史的意義

いまは広く知られている事実であるが、1950 年 6 月 25 日の早暁に起きた朝鮮戦争は、前例のない不意の衝突ではじまったものではない。半島の双方間の衝突は、開戦前の数年間にわたってつづけられ、1949 年には、北上を狙う、ソウルの圧力のもとにいっそう激しさを加えていた。一部の朝鮮問題専門家は、戦端は実際にはその年に開かれたと見ている。1949 年 5 月、南朝鮮が 6 個歩兵中隊と数個大隊を投じて起こした激戦で、北朝鮮の兵士 400 人と南朝鮮の兵士 22 人が戦死した。

ところで、米国は李承晩の北侵企図を最初から支持したのではなかった。ワシントンとソウルの軍事分析家のあいだには、南朝鮮の兵力があらゆる面で北朝鮮より優勢であるという見解が支配的ではあったが、1949 年に米国は、南朝鮮の北進企図を牽制しようとしたのである。スターリンの膨張主義的見解と、そして毛沢東主義中国の勝利を考慮して、ワシントンは第 2 次世界大戦直後に第 3 次世界大戦が起きるのを憂慮したのだった。

しかし、純粋に軍事的見地に立って見るならば、李承晩大統領が当時、北朝鮮への攻撃をあせったのにはそれなりの理由があったといえる。北朝鮮は弱小で、毛沢東はまだ中国全域の支配を固めていなかった反面、南朝鮮兵士の士気はすこぶる高かった。

にもかかわらず米国が李承晩のはやる心を抑えたのには、いま一つのより重要な理由があった。

ワシントンにとって、「どちらが先に発射したのか？」が明らかにされるのは、特別に重要な意味をもっていたのである。米国務省国連問題担当次官補ヒッカーソンが、1950 年、上院予算委員会でおこなった証言で明らかにしたとおり、米国は開戦前早くも、南朝鮮が攻撃を受けた場合、国連の旗による米軍の南朝鮮派兵を国連で通過させる計画を立てていた。そのためには、「最初の発射」が北朝鮮によってなされたとするか、少なくともそのように問題が提起されなければならなかった。しかし、1949 年 5 月事件のときと同様に、南朝鮮が先に発射したことが明らかにされれば、国連憲章は国連加盟国が、南朝鮮を「侵略者」と非難し、北朝鮮を侵略から保護するよう作用するであろう。

とにかく朝鮮戦争でどちらが先に発射したかを明らかにする公正な決め手がなかったが、米国はソウル駐在米国大使から送られた不十分な報告をもとにして、国連安全保障理事会で南朝鮮の防衛に介入する決議案を通過させることに成功したのである。

国連安全保障理事会が米国の提案を確実な根拠にもとづいて受理しただろうか、という疑問は、『秘史朝鮮戦争』の著者Ｉ・Ｆ・ストーンによって、最初に提起された。

ストーンが明らかにしたように、公式の国連議事録によれば、リー国連事務総長は国連駐在米国代表アーネスト・Ａ・グロスから電話で北朝鮮の「侵略」を通報されている。グロスは、ソウル駐在米大使ジョン・ムチョーから送られたという電文を読んだ。それは「北朝鮮軍はけさ、いくつかの地点で大韓民国の領土を侵犯した」というものだった。

グロスは、そのような状況のもとでの攻撃は「治安妨害、侵略行

為」であるとして、安全保障理事会の即事開催を要求した。

ところが、国連に登録されたグロスの電話文とムチョーの電文を読み比べたストーンは、グロスがムチョー大使の電文をそのまま国連事務総長に伝えたのではなかったことを発見した。グロスは、171の単語からなるムチョーの電文を読んだのでなく、それを 38 の単語につづめて作成した米国務省の声明文を読んだのである。ムチョーは電文で、侵略にかんする南朝鮮の報道が「部分的に」南朝鮮駐屯米軍事顧問団によって確認されたとしている。ところが米国務省の声明は、「大韓民国駐在米国大使は米国務省に、北朝鮮軍が、1950年 6 月 25 日未明、いくつかの地点で大韓民国の領土を侵犯した」ことを知らせてきたと、断定的に述べている。それればかりか、ムチョーの電報原文は、1 か月余ものあいだ安全保障理事会に提出されなかったので、討議に役立たなかった。ストーンの検討後に提起された疑問点は、米国が確かな根拠をもってこの件を提起したのかということである。ストーン以外誰一人として政府の内外でこのような疑問をさしはさんだ者はいなかった。

ここで指摘しておきたいことは、どちらが先に発射したかという問題が「法的」な意義をもつことは確かであるが、それ以前に、互いに戦火を交えた「二つの朝鮮」がどうして存在するようになったかという、より根源的な問題がまったく曖昧にされていることである。歴史には、第 2 次世界大戦末期、米国とソ連が朝鮮を二つに分割し、前者は南半部を後者は北半部を占領したと記録されている。

朝鮮人は、それが自国の滅亡を意味するものと認めて驚愕した。ところで、米国とソ連の二つの占領軍の政策は全く異なっていた。ソ連はその地域で、現地における朝鮮人行政機構の活動を許した。

そのメンバーはしだいに交替して、金日成の導く民族共産主義者が政権を掌握し、やがてソ連人は引き揚げた。

米軍地域で米当局は、いかなる朝鮮当局の存在も許さないとし、通訳官を介して統治する米軍政を実施した。米国人は統帥権を完全に掌握し、結局は、南朝鮮駐屯米軍司令官ホッジ将軍から不適格者と言われていた李承晩が、その徹底した反共世界観を背景に、南朝鮮の指導者に選ばれたのである。その後の 3 年間に、李承晩は非合法的手段ですべての反対派を制圧し、米国の支援で国連に南朝鮮の単独選挙を主管させることに成功した。

軍事的手段による統一の熱烈な主張者李承晩は、予定通り大韓民国大統領に当選した（1948 年）。

南に反共政府が出現し、ついで北に共産国家が建てられた結果、朝鮮で冷戦は激しくなり、朝鮮人民にとって衝突の可能性は生活的な現実となった。今日、南朝鮮の多くの人たちは、トルーマン政府が喧伝した「最初の発射」が問題ではなく、まさに上述の事実が朝鮮の分裂をまねき、悲劇的な戦争を引き起こす大砲となったと考えている。

第２章　朝鮮戦争を先に起こしたのは誰か？
相反する主張

朝鮮戦争の勃発にかんする米韓の公式見解は、およそつぎのようなものである。

共産主義の北朝鮮がソ連の指示で、1950 年 6 月 25 日、無辜の南朝鮮に戦争をしかけた。

その日の午前 4 時、北朝鮮軍は圧倒的に優勢な兵力と武器をもって、事前に準備した南朝鮮への攻撃を開始した。しかし、北朝鮮がそれまでの 2 年間、南朝鮮をたびたび攻撃していたことから、南側の防御者は今度の攻撃が以前と同様な一時的な攻撃か､それとも「真の戦争」か判断できなかった。午前 8 時、北側の攻勢は境界線の全域に拡大し、ついに真の戦争であることがほとんど確実視されるようになった。ちょうどその時点で、ソウル駐在米大使ムチョーはワシントンに報告を送ったのである。その報告の内容はつぎのとおりである。

「韓国駐在米軍事顧問団野戦顧問たちの報告によって部分的に確認された韓国軍の通報によれば、北朝鮮軍はけさ、いくつかの地点で大韓民国の領土を侵犯した｡行動はきょう午前 4 時に開始された。北朝鮮の砲火力によって甕津が破壊された午前 6 時頃、北朝鮮の歩兵が甕津地域、開城地域、春川地域で 38 度線を越えはじめ、東海岸の江陵の南に上陸したという。午前 9 時に開城が占領されたといわれ、この作戦に北朝鮮の戦車約 10 台が参加したという。北朝鮮

軍が戦車を先頭に春川に接近しているとのことである。北朝鮮人が江陵の道路を遮断したようだが、当地域の戦況は明らかでない。わたしはけさの情勢と関連して、米軍事顧問団の顧問たちと協議することにした。攻撃の性格と様相からすると、これは大韓民国にたいする全面攻撃でありうる。ムチョー」

朝鮮民主主義人民共和国は米韓の主張を断固否認し、むしろ南朝鮮が米国の指示で戦争をはじめたと主張している。かれらは、全面戦争が 1950 年 6 月 25 日の朝にはじまったことでは、米韓の見解に同意しながらも、実際にはそれが 2 日前にはじまっていると強調している。6 月 23 日午後 10 時に、韓国軍が甕津半島東部で 105 ミリ曲射砲と重迫撃砲をもって朝鮮民主主義人民共和国の防御陣地を砲撃し、それは 6 時間つづいたというのである。南朝鮮軍はそれ以前も、奇襲部隊の攻撃をカモフラージュするためこのような砲撃をたびたびおこなっているが、砲撃がそんなに長くつづいたのはこれがはじめてであった。かれらは、それが米国の特使ダレス一行による 38 度線地域の視察数日後の出来事であったことに注意を向け、それを見すごすことのできない論拠としている。かれらは、このかつてなく長い砲撃を、李承晩が長らく豪語してきた北進の幕開きであると見ているのである。

その 6 時間の砲撃後しばらく砲声は止んだが、再びいくぶん度数の低い砲撃がはじまり、それは 6 月 25 日午前 4 時頃までつづいた。北側はそれを、南側が全面攻撃に先立っておこなう煙幕であろうと疑った。そうした疑念は、西部、中部および東部の各前線で韓国軍が攻撃態勢をとっているという状況報告でいっそう深まった。ここに、平壌外国文出版社で 1979 年に出版された資料がある。

「かいらい軍は同日未明、38 度線全域にわたって侵攻を開始し、海州、金川、鉄原一帯では 1～2 キロメートルも北半部の領域に侵入した。

戦線西部ではかいらい軍首都師団第 17 連隊が苔灘、碧城方面に侵入し、第 1 歩兵師団は開城付近で三つの方面に進撃し、第 7 歩兵師団は漣川地域に向けて侵入を開始した。

戦線東部ではかいらい軍第 6 歩兵師団が華川、楊口方面に進撃し、東海岸の第 8 歩兵師団は三つの方面から襄陽に向けて侵入してきた。

（略）

人民軍各部隊と警備隊に敵の攻撃を阻止し、即時断固たる反撃に移るよう命令がくだった。（略）　アメリカ帝国主義とその手先の武力侵攻を撃退する祖国解放戦争はこうして始まった」

第３章　相反する主張についての検討

前章で紹介した双方の主張は、つまびらかなものではないが、朝鮮戦争がどのようにはじまったかという米韓側と朝鮮民主主義人民共和国側の主張がそのまま反映されている。
それらの内容を簡単に検討してみよう。

米国・韓国

ムチョー大使の報告には注目すべきいくつかの問題がある。第 1 にそれは、「部分的に確認」されたという間接的な通報にもとづいていることである。そのため、ムチョーは境界線の情勢について自らの判断を示すことができなかった。第 2 に、その報告が韓国国防部の官吏によって米軍事顧問団野戦顧問官に提供された情報にもとづいていることである。米国の官吏がしばしば評しているように、韓国官吏の信頼性は概して疑わしいものであった。第 3 に、米軍事顧問団野戦顧問官は数人にすぎず、それに、前線での事態進展の情報を韓国軍から得ていた。かれらが、韓国側の通報を自分の目で確認したかどうかは疑わしい。第 4 に、注意深く書きだされたムチョーの報告の冒頭の叙述とあとのそれには矛盾した点がある。かれは「北朝鮮軍はけさ、いくつかの地点で大韓民国の領土を侵犯した」としながらも、あとでは「攻撃の性格と様相からすると、これは大韓民国にたいする全面攻勢でありうる」と付言している。第 5 に、

北朝鮮が「大韓民国の領土を侵犯した…」と断定したあと、それらの通報を調査する計画であるとしたのは、その断定から少し後退したといえよう。結論を言えば、ムチョーの電報は一つの仮想をもとにした報告だったのである。

それにもかかわらず、ワシントンではムチョーの電文を確定的なものとして扱った。東アジア問題担当国務次官補ディーン・ラスクは、ソウルからの報告を受け取ると、夕食を中止して事務室に駆けこみ、中堅級官吏を数人呼んだ。しかし、国務長官アチソンと大統領トルーマンには、朝鮮における危機が直ちに報告されなかった。メリーランド近くの自分の農場に帰っていたアチソンは、数時間後にそのことを知らされた。ミズリー州の故郷を訪れていたトルーマン大統領は、報告をもっと遅く受けただけでなく、急いでワシントンに帰る必要はないという勧告までされている。

まことに奇妙だというほかない。米国が 3 番目に大きな犠牲を払うことになったその戦争の前夜に、米国の立場を代弁すべき大統領と国務長官が二人とも外出していたのである。国務省に集まった中堅級官吏は、政策の作成者ではなく、外へ出払っていた長官クラスの命令を実行する人たちにすぎなかった。のちに米国は、これを驚くべき意外な出来事であったとしている。しかし、かれらの初期の行動には、たしかに陰謀のにおいがするのである。ムチョーの電報を受け取ったときのかれらの平穏ぶりは、北朝鮮の不意の侵略だとする主張とはまるでそぐわないのである。

ムチョーの電報を受け取った時点でのワシントンの反応は以上のようであったし、また、開戦の公正な目撃者もいなかった。当時、前線近くにいたのはただ、韓国軍第 12 連隊に属する米軍事顧問団

の野戦顧問官だけであった。ところがその夜、かれは、38 度線から遠く離れた米軍事顧問団の構内ですごしており、しかもかれが砲撃の音に驚いて目を覚ましたのは、戦いがはじまったといわれるときから 1 時間が経過した午前 5 時頃であった。だから、ムチョーが送れる唯一の正しい報告は、どちらが先に発射したかは確認できない、というものでなければならなかったのである。

朝鮮民主主義人民共和国

南朝鮮への北朝鮮の進撃が攻撃か反撃かという問題は、戦争の傷が癒え、1950 年 6 月 25 日早朝の衝突に参加した人たちと広く談話できるようになってはじめて確認できるはずである。けれども、わたしがおこなった研究と、李承晩とその活動、かれの側近たちにたいするわたしの理解にもとづけば、南朝鮮が米国の「手先」となって戦争を引き起こしたとする朝鮮民主主義人民共和国の主張は十分に筋が通っているといえる。もう少し正確にいえば、李承晩がダレスの力添えで戦争を起こしたものとわたしは信じるのである。

軍事的手段によって朝鮮の統一をはかる李承晩の主張と、共産世界にたいする「巻き返し」政策を主唱するダレスの政策的主張は二人を結びつけた。

冷戦が進み、米議会選挙日が迫ると、李承晩と米対外政策にたいする共和党の主要代弁者ダレスがくりひろげていた「強硬」な反共政策実施を要求する院外運動は項点に達した。そこでトルーマン大統領は、米国の対共産圏政策をめぐって激化する両党の抗争を緩和するため、ダレスを行政府へ引き入れた。朝鮮の運命はこうして決

まったのである。

ここで、李承晩とダレスがどのようにして結びついたかを見てみることにしよう。

第2次世界大戦後の数年間、米国はさまざまの国内・国際問題に悩まされ、戦争に手をつける状況になかった。米国人は戦争でひどく疲れていた。かれらは夫やわが子の帰還を待ちわび、また、戦時の税負担や各種制限措置の解除を求めていた。かれらは共産主義の世界的台頭を憂慮してはいたが、それは主に東ヨーロッパにおけるスターリン主義的膨張主義への懸念であり、朝鮮のもつ戦略的意義は認めながらも、かれらはそれにあまり関心をいだいていなかった。そんなわけで、朝鮮にたいする米国の態度は透明でなかった。しかしながら国内外における事態の急激な発展は、トルーマン政府を窮地に追いこんでいった。民主党の長期執権にあきあきしていた米国人たちは、「民主党政権20年」間のいろいろな不快な出来事を非難し、とくに、民主党が共産主義に断固たる態度をとらなかったため、中国を共産主義者に奪われたとする共和党の政府攻撃に同調した。

こうした米国の内情と東西冷戦の激化は、トルーマン政府に、南朝鮮を共産支配下に入れるのがスターリンの目標に違いないという懸念を強めさせた。1950 年の国会選挙が近づくにつれ、トルーマンは「共産主義に弱腰だ」という共和党の非難がいっそう強まった。ギリシアとトルコの共産化防止に一役買ったトルーマン大統領は、共和党の政府攻撃を的はずれだとして、朝鮮でそれが戦争を意味しようとも、けじめをはっきりつけようとした。1950 年初、ワシントン駐在韓国大使張勉は、「国務省とペンタゴンでは、アメリカの極東政策にかんして確固たる態度を示すべく計画中ですが、この防

共計画には韓国が重要な地位を占めるだろうとのことであります」と李承晩に報告している。

このような政策の遂行をはかるトルーマン大統領は、対外政策のタカ派である共和党の代弁者ダレスを対日講和問題で国務長官を補佐する大統領特使に任命した。大統領の意図は、共和党の政府攻撃をなだめる一方、共産圏国家にたいする米国の立場を強めることにあった。米国内のもっとも強硬な反共産主義者の一人ダレスが、米国の東アジア政策に大きな影響力を行使することになったのは当然のなりゆきであった。そしてそれは、李承晩がトルーマン政府内に有力な同盟者を得たことを意味した。こうして、第2次世界大戦の終結以前は「朝鮮についてなにも知らなかった」と自認するダレスが、南朝鮮大統領のもっとも近い理念的同盟者の一人になったのである。

米国代表団の一人として1948年の国連総会に参加したダレスは、「韓国民の合法的意思」を表示して樹立された李承晩政権を朝鮮の唯一の合法政府であると国連に認めさせるうえで主役を果たした。ここでダレスの目的は、朝鮮で民主主義を守り、または李承晩そのものを擁立することにあったのではなく、アジアにおける米国の反共・転覆活動の拠点を東アジアに設けることにあった。それはかれが、南朝鮮は「まもなくくりひろげられる大演劇の重要な役」を担当するであろう、とくりかえし公言していることからも明らかである。それは驚くべき豹変ぶりであった。かれは、1945年以前は「朝鮮についてなにも知らなかった」だけでなく、同年4月、サンフランシスコで開かれた国際機構会議への李承晩の参加を拒む政府に同調していたのである。

ところがそれから２年もたたずに、ダレスは南朝鮮での単独政府樹立をもくろむ李承晩を積極的に支持し、「民主主義のとりで」とまでたたえた。こうして南朝鮮大統領は、ダレスを自分のもっとも近い友人の一人とみなした。しかし、二人の友情は利己的なものにすぎなかった。李承晩の野望は南半部はもとより統一朝鮮の終身統治者になることであり、ダレスのそれは李承晩の大統領就任を助けることで、北朝鮮ひいては中国征服の基地をアジア大陸に設けることであった。どちらが先に火をつけたにしろ、朝鮮戦争は開始された。北へ侵攻し鴨緑江をめざして進撃していたころは、両者の見解は一致していた。

　ところが戦いが不利になると、ダレスは停戦を主張し、李承晩は強硬に反対したが、むだであった。

第４章　戦争は不可避だったのか？

朝鮮戦争は避けられなかったのだろうか？　そうではない。事実、全朝鮮人民は国の分裂を防ぐため必死の努力をつづけた。絶対多数の人たちは国の平和的統一と自主的な民主朝鮮づくりに取り組んでいた。わたしの知る限りでは、米国は最初朝鮮戦争への介入を望まなかった。南朝鮮駐屯米軍司令官ホッジ中将は、朝鮮半島で戦争が起これば、南朝鮮から米軍を遅滞なく撤収させる計画だと言っていた。

＊　1947 年、ホッジの招請に応じた徐載弼は、自分の補佐官としてソウルへ随行してくれるよう、わたしに頼んだ。わたしは同意した。協議のためワシントンにやってきたホッジはわたしを呼び、徐載弼博士との同行を承諾するかと聞いた。わたしはそうすると答え、家族を同伴してもよかろうかとたずねた。かれは「いけない」とかぶりをふり、朝鮮で戦争が起きる可能性が大きい、その場合、自分の第 1 の任務は米国人を朝鮮から引き揚げさせることだ、と説明した。かれは面倒になるのを望まなかったので、誰にも家族の同伴は許さないと命令していた。かれは、「わたし自身はもちろん、わたしの補佐官もみな家族を残した」と言うのである。

とくに、米軍の南朝鮮占領直後、米国務長官ジェームス・F・バーンズは、モスクワで米国、ソ連、英国の3国外相が朝鮮の平和的統一を保障することに合意したと宣言している。そのためにかれらは、米ソ両占領軍司令官に、共同委員会を構成し、両地域の政治、社会、文化の各組織と協商して、広範な基盤をもった全朝鮮の民主的臨時政府の樹立をはかる勧告案を提出するよう指示した。

このような事情は、ソ連が朝鮮問題の平和的解決を心から望んでいたことを立証している。

では、なにが全関係当事者の希望を水泡に帰せしめたのだろうか。

その回答を概括すればつぎのとおりである。

第1に、冷戦の暗雲が全当事者の理性をくもらせ、互いに相手にたいして偏見をいだかせるようにしたことである。

第2に、南朝鮮を占領した米国人は朝鮮と朝鮮人民にたいする認識が極めて浅く、ただ抽象的な理論にとりついていた。そのため、米軍政が抜きさしならない泥沼へますます深くはまりこんでいったことである。

1948 年初め、ソウルに着いて現地の事態に接したとき、わたしは 1941 年 12 月 7 日の出来事を思い浮かべた。当時、わたしは米国の大学で国際政治学を専攻する研究生であった。大学で担当教授が得意とする理論の一つは、大国間の戦争には極めて多くの共通点があり、戦争は疑いなく双方に損失をもたらすだけであるというものであった。かれの熱心な解説には、多くの学生が魅惑されていた。ところが、第1学期がまもなく終わろうとしていたとき、日本が米国を攻撃したのである。12 月 7 日の昼すぎ、なにげなくラジオのスイッチをひねったわたしは、唖然となった。日本が真珠湾を攻撃

したという短いニュースが耳に飛びこんできたのである。わたしはすぐに電話で一人の学友にニュースを聞いたかとたずねた。かれは聞いたと答え、「スプラウト教授に電話で、日本が真珠湾を攻撃したというラジオ・ニュースを聞いたかとたずねると、かれは初耳だ、『信じられない』と言って否定するのだ」と、興奮した口調でつけ加えた。

米国は日本という国を知らなかったがために大きな代価を払った。真珠湾事件が起こる以前は、ごくわずかの米国人、すなわち日本にいる米国人宣教師の子弟だけが日本の大学に学んでいた。それで、米国は日本との戦争がはじまると、日本語や日本の地理、文化に通じた専門家の不足に大いに悩まされた。

南朝鮮を占領した当時、朝鮮と朝鮮人民にかんする米国人の知識は、真珠湾事件以前の日本についてのそれより劣っていた。かれらの知識といえば、朝鮮と朝鮮人民をさげすんでいた日本人からの聞きかじり程度のものだった。

そんなわけで、米国は朝鮮を人間の住むに耐えない荒れすさんだ土地、朝鮮人を野獣のような存在とみなした。米国は第2次世界大戦末期、朝鮮人指導者とはなんらの協議もしないで朝鮮の分割を提起し、ソ連もそれに同意した。ワシントンは米軍に 38 度線以南への進駐を命じ、米軍が解放者として朝鮮に上陸すると宣言した。ところが、南朝鮮駐屯米軍司令官ホッジ中将は、米軍は占領軍であり、自分は南朝鮮地域の支配者であると公言した。しかし、かれらはなんの準備もせず、銃1発撃たずに南朝鮮にやってきていたのである。事実上、米国務省の内外には朝鮮問題専門家は一人もいなかったし、米国に朝鮮問題を講義する大学もなかった。国務省東アジア課の職

員はほとんどが日本専門家で、朝鮮には詳しくなかった。

米国人は北朝鮮のことにはもっと暗かった。かれらは、教育を受けた人たちや、富裕な朝鮮人のほとんどが南の米軍占領地域に逃げてきたこと、日本人が建設した鉱山や産業施設は息を吹き返せないでいること、北朝鮮はソ連の「衛星国」になったなどという、単純で浅薄な見解にとらわれていたのである。

北朝鮮にたいするこのような無知は、潜在的な敵にたいして現実主義的評価をくだせなくした。

戦争前夜の北朝鮮とアンクル・サム（米国）について、これ以上正しく説明することが可能だろうか？

2 巨人の衝突

ワシントンで国務省の一部下級官吏は、第 2 次世界大戦後に米国が東アジアで果たす役割を研究するよう課題を与えられた。研究報告書の全文は公開されなかったが、その一部の朝鮮関連部分は明らかにされている。報告書の勧告案には、つぎのような内容が含まれている。米国は第 2 次世界大戦前の状態に戻ってアジア政策から手を引くべきでなく、朝鮮を重要拠点にして、この地域で重要な役割を果たさなければならない。そのために米国は、朝鮮のいかなる民族主義指導者やそのグループも支持してはならず、大戦が終わるまで空白にしておくこと。大戦の終結前に朝鮮の独立にかんする立場を明らかにする必要が生じた場合、最大の柔軟性をもたせるよう、一般的な言いまわしをすること。そしてこの勧告案には、朝鮮人の利害関係は一切考慮されていなかった。その作成にあたってはどの

朝鮮人とも協議されなかったし、最終案もまた知らされなかったのである。

米国は第 2 次世界大戦当時、戦後の朝鮮問題にかんしてはいっさい口を閉ざしていたが、1943 年にはじめて、朝鮮は「適当な過程を経て」自由な独立国家になるであろうというカイロ宣言に署名することによってその意思を表明した。それは朝鮮人の激しい抗議を呼んだ。しかし、「アンクル・サム」は「適当な過程を経て」という意味を明らかにすることを拒んだ。

朝鮮とロシアの極東、中国東北地方の山岳地帯で、朝鮮の青年遊撃隊指導者金日成とその部下は、日本の手中にある祖国を解放するための戦いを活発にくりひろげた。かれらは民族主義的な闘争過程に中国とソ連の人たちの同情と鼓舞を受け、ついには共産主義への道に進んだ。

わたしの知る事実はつぎのようなものである。

かれは中学校を中退し、独学をしながら志を同じくする遊撃隊員を集結し、中国の地で反日戦争を展開した。かれは日中は農事を手伝って日本支配下の朝中農民の支持を獲得した。1930 年代、遊撃隊指導者としてのかれの名声は、朝鮮はもとより遠く北満州、極東ロシアにまで広がった。かれは重なる試練と困難をついて、敵の後方で政府をどう立て運営すべきかを体得した。このようにかれは、遊撃戦争の支持基盤をきずいたばかりでなく、のちに北朝鮮の領袖となったとき、その貴重性が立証されることになる政治経験を積んだ。1945 年、日本の敗北後、金日成は北に、アンクル・サムは南にそれぞれ到着した。両者の出現は朝鮮戦争を予告するものであったといえるから、両者の個性を少し詳しく見るのは意味のないこと

でなかろう。

両者は完全に対照的であった。アンクル・サムは老年の大男で高慢であり、金日成は 30 代　“の自信にみちた青年であった。アンクル・サムは世界最強国の代表者、反共世界の旗頭であり、金日成は共産主義者であった。なによりも重要なのは、アンクル・サムは朝鮮を反共のとりでにし、東アジア地域への影響力を行使するために朝鮮へ来たのであり、熱烈な民族主義者金日成は、なんとしても朝鮮を外国の支配から解放しようと決心していたのであった。

こうした相違に加えて、米国の政策作成者は朝鮮の民族主義について無知であった。これはいずれ両者の衝突を引き起こすであろうことを予測させた。

1950 年 7 月、米国の戦争介入によって、両者は衝突した。アンクル・サムは金日成の屈服を期待したが、金日成はそれを拒んだ。朝鮮は朝鮮人のものである、アンクル・サムは朝鮮から手を引け、というのである。アンクル・サムは国連の名を盗用して北朝鮮を懲罰しようとやっきになった。しかし、戦争は勝利者がないままに終わり、双方はそれぞれ自分の勝利を主張した。米国は朝鮮民主主義人民共和国に、「侵略によっては得るものがない」ことを示したとし、朝鮮民主主義人民共和国は、全朝鮮の占領をもくろむ米国の試みに打撃を加えたと主張している。

アンクル・サムは全面戦争で勝つことができたかも知れないが、それは恐らく第 3 次世界大戦を誘発したであろう。

中国の参戦によって、戦争が開始された地点で停戦協定が結ばれることになった。しかし、それがアンクル・サムに戦争を止めさせた原因のすべてではない。米国は 5 万 5 千人の生命を失い、200 億

ドルを費やしたあげく朝鮮の民族主義と、民族のために戦おうとするかれらの意思が無視できないものであることを思い知った。

米国の軍事的弱点の最大の要因は軍隊にあるのではなく、ワシントンのなまはんかな政策作成者にあった。かれらは兵士たちに、なぜかれらが朝鮮へ行かなければならないかを納得させることができなかった。かれらは「敵の共産主義者を撃滅」するために派遣されたのだが、朝鮮で聞いたのは「なぜわれわれを殺すのだ？　われわれは、われわれの糧穀を奪う抑圧的地主や親日分子に反対しているのだ」ということだった。兵士たちは、なぜわざわざ不毛の地へ行って共産主義も民主化も知らず、干渉を望まない人たちを殺さなければならないのか理解できなかった。かれらが聞いて納得した言葉は、米統合参謀本部議長オーマル・N・ブラッドレーの発言だけであった。1951 年、交渉によって朝鮮戦争を解決するか、それとも勝利するまで戦うか、という問題をめぐって熱のこもる論争がくりひろげられていたとき、ブラッドレーは、前者に積極的に賛成し、朝鮮戦争は誤って選んだ場所で、誤って選んだ時に、誤って選んだ敵にたいする誤った戦争であると主張した。米国上院におけるブラッドレーのこの発言は、われわれを大いに感動させた。

米国と李承晩

朝鮮の民族主義は、米国がその同盟者李承晩に対処するときにも問題になっていた。金日成とは違って、李承晩は生涯の大半を朝鮮の保護者になってくれる大国を探し歩いた。李朝時代、封建中国は朝鮮の宮廷を通じて保護者の役割をした。20 世紀初、李承晩は

朝鮮の救援を米国に求めようとした。かれが米国と接触をはじめたのは 1905 年からで、そのときは在ハワイ朝鮮人の名でセオドア・ルーズベルト大統領に請願書を提出した。かれらはルーズベルト大統領に、日本が 1876 年の朝日条約に背いて朝鮮の自主権を奪ったため、1882 年の朝米条約にもとづいて友好的な決議を採択してもらいたい、と要請したのである。

李承晩は奔走した。米大統領はかれに、請願書が国務省を通して届けられるなら受理するであろう、と言った。国務省で李承晩は、請願書はワシントン駐在朝鮮公使から提出されれば受け取ると言われた。

朝鮮公使館では公使から、ソウルの指示なしに伝達することはできないと断られた。当時、李承晩は 1 年前に米国が秘密協約で朝鮮にたいする日本の事実上の支配権を認め、日本が朝鮮とワシントンとの関係を統制していること、朝鮮公使がそのことを知っていることを知らなかった。失敗した李承晩は断念して、ジョージ・ワシントン大学に入学した。李承晩と国務省との接触は、1919 年にもあった。

第 1 次世界大戦後、民族自決権をとなえるウィルソンの 14 か条の宣言に力を得た朝鮮人は、日本から独立するために激しい示威をくりひろげ、中国の上海に臨時政府本部を設けた。主席には李承晩が就任した。恐らくそれは、李承晩がウィルソン大統領と特別な関係にあったからであろう。李承晩がプリンストン大学の研究生であったとき、ウィルソンが大学総長を勤めていた関係で、二人は個人的に知り合っていた。しかし、それは意味のないものだった。ウィルソン大統領は、李承晩を大韓民国臨時政府主席として認めること

を拒絶したばかりでなく、李承晩から送られてくる手紙はいっさい国務省にまわすよう指示したのである。国務省は、パリ平和会議に参加したいからビザを発給してほしいという李承晩の要請さえ無視してしまった。

これとは反対に、ロシアのレーニンは、世界のどの地域においても帝国主義に反対すると宣言し、モスクワを訪れた朝鮮の指導者をあたたかく迎え入れた。朝鮮人たちに会ったレーニンは、どれほどの寄付金が必要かと聞いて、かれらを驚かせた。朝鮮の客はしばらくの沈黙ののち、「50 万ルーブルばかり」と答えた。するとレーニンは、「それでは大したことがやれない」と言い、かれらに 100 万ルーブルを与えたという。

朝鮮人民の念願にたいする米国とソ連の相異なる反応は、朝鮮の指導者たちに影響を与えた。かれらは分裂した。総理李東輝らは親ソ派になり、安昌浩らは長くかかっても自力で独立を達成しようとし、李承晩らはワシントンへの依拠を主張した。

事実が示したように、すべての関係者は結局、自分たちの利害関係に関心を向けていた。

ウィルソンは、国際連盟創設問題で日本の支持を得るため、朝鮮を犠牲にし日本を喜ばせる道を選んだ。李承晩は、1921 年にしばらく上海に滞在したが、上海臨時政府を離れてハワイに帰った。上海を去るときかれは同僚たちに、国務省から再三拒絶されてはいるが、自分はワシントンとの外交を通じて朝鮮の独立を達成するために発つ、と言明した。

かれは友人たちに、自分は外交官ではなく、実際はアジテーターだと言っていた。かれと米政府との関係は依然としてかんばしくな

かった。
米軍の南朝鮮占領後も、朝鮮に帰りたいという李承晩の要請を、国務省は拒絶した。かれは、マッカーサー司令部のとりなしでやっとソウルへ帰ることができた。1945 年の南朝鮮到着以来、苦境にあった南朝鮮駐屯米軍司令官ホッジは、李承晩の帰国を喜んで受け入れた。朝鮮の歓心を買うのには李承晩の援助が必要だと期待したのである。
まるで見ず知らずの国に来たホッジは、朝鮮人を沖縄人と大した違いがないとみなし、降伏した日本植民地統治者を南朝鮮の支配に引き入れるという大きな過ちを犯して、朝鮮人を驚かせた。そうしたときに李承晩の経歴を知ったホッジは、かれの帰国を快諾したのである。かれは、李承晩のような人たちを補佐官に迎えれば、朝鮮での仕事がいちだんと容易になるだろうと考えた。こうして李承晩は、米軍の南朝鮮占領後、亡命先から帰国した最初の人間となった。
帰国途上、かれは東京に立ち寄り、連合軍最高司令官マッカーサー将軍を表敬訪問した。二人は会った瞬間から意気投合した。のちに、わたしはわたしの勤めるソウル中央庁の前で李承晩の就任式がおこなわれたさい、肩を並べて立っている二人を見た。李承晩の就任演説は一言でいって、戦争を呼びかけたものであった。マッカーサーはそれが気に入ったらしく、南朝鮮の新大統領李承晩の肩に手をおいて一緒に歩きながら、なにか語っていた。しばらくのち、二人に随行した一高位将校から聞いたことであるが、そのときマッカーサーは李承晩に「貴国が攻撃を受けた場合、わたしはカリフォルニアを守るように、貴国を守って戦うであろう」と言ったという。
わたしの知るところでは、マッカーサー将軍は開戦にさいして、

事実上受動的な立場にあった。けれどもいったん戦いがはじまると、朝鮮駐屯国連軍司令官の職務を喜んで引き受けた。マッカーサーの主な関心事は、中国から毛沢東を追い出し、蒋介石を押し立てることであった。とはいえ、マッカーサーが朝鮮にあまり関心をいだいていなかったというのではない。日本軍国主義者と同様、かれも朝鮮を中国への通路とみなしていたようである。しかし、それは戦争へとつづく一連の出来事の前のことである。

1945 年 10 月中旬、李承晩がソウルへ戻ると、ホッジ中将はかれを英雄として迎え入れ、歓迎群衆に、「わたしはみなさんにあなたたちの指導者を贈る」と言った。

李承晩の簡単な答礼演説は、ホッジを大いに喜ばせた。白髪の朝鮮指導者は、朝鮮人が深刻な問題に直面しているという言葉で演説をはじめ、「統一、統一、統一」と統一の必要性を力説することで、それを結んだ。ホッジはほほえんだ。李承晩が全朝鮮的な大衆的基盤にもとづき、民主的で親米的な政府の樹立をめざしてたたかうであろう米軍事顧問団を助けて、南朝鮮人を結集することに貢献するに違いないと考えたのである。ホッジはその後、李承晩に最高顧問理事会の議長職を与え、南朝鮮の唯一の官営ラジオ放送局をかれにゆだねた。

ホッジと李承晩の蜜月は長くつづかなかった。ホッジが望んだのは、李承晩が自分を助けて極左と極右のグループを除く統一戦線を張り、民主的で親米的な政府を樹立することであった。ホッジは、南側のそうした統一戦線と北の非共産主義朝鮮人が連合すれば、朝鮮の両地域にある共産主義者は容易に制圧できると確信し、李承晩がその計画実行に役立つであろうと考えたのである。

しかし、きわめて残念なことに、李承晩はホッジに協力的でなかった。過激な反共産主義者であったかれは、自分の立場を支持するグループと個別人だけを「統一戦線」に受け入れるべきだと主張した。

ホッジは李承晩に、自分はあなたを尊敬するが、朝鮮の未来を決定する権利をあなたが独り占めすることには同意できない、と言った。それ以来、二人は仲違いした。李承晩はホッジを共産主義の容疑者とみなし、ホッジは李承晩を朝鮮の「困り者」だと考えた。

＊　わたしの職務が、すべての韓国指導者の行動と思考にたいしホッジと徐載弼の「目と耳」になることであった関係上、李承晩とホッジに随時合うのはわたしの責務といえた。そういうわけで、　わたしは二人によく会った。わたしは、李承晩がホッジを「共産主義の間抜け者」と言い、またホッジが李承晩のことを下品な言葉でののしるのを聞くとき、なんともつらい思いをしたものである。

ホッジは愚かな男ではなく、理知的で誠実な人間だった。もともと技師であり、第1次世界大戦以来職業軍人であったかれには、朝鮮にかんする知識を得る機会がなかった。それに朝鮮人が日本の植民地主義者とその同盟者である朝鮮の封建主義者に抗してたたかった 40 余年のあいだに、朝鮮に醸成された政治伝統を把握するうえで、かれはワシントンに依拠することができなかった。「民主的」統一戦線の形成に努めたにもかかわらず、結局かれが南朝鮮の極右勢力に依拠せざるをえなくなったのは、米国対外政策の反共的な性

格のせいであった。かれの努力は失敗するほかなかったのである。
　ホッジは、李承晩の妨害に悩んだ。それに李承晩の陰口にひどく気分を害していた。とにかくかれは、李承晩の参与いかんにかかわりなく、統一戦線を形成しようという希望を捨てなかった。李承晩は怒り、ホッジを朝鮮から追い出す計画を立てた。かれは、主だった腹心を自宅に呼んで高位級秘密会議を開き、3,000 万の朝鮮人が一人当たり 1 円を出せば 3,000 万円の朝鮮独立資金を得ることができる、それを持って米国へ渡り、朝鮮の独立を果たして帰ると言った。会議の参加者たちは募金に同意し、即時献金することを約束した。金性洙は自分と弟の名義で 100 万円を提供することにした。資金は 6 週間内にととのった。
　李承晩はホッジを訪ねた。そして、ホッジへの軽蔑感をみじんも顔にあらわさず、私用で米国へしばらく行ってきたいから、承認してほしいと言った。ホッジは李承晩の腹を疑い、申し出を拒絶しようかと思ったが、それでは狭量すぎると考え直して、譲歩した。1947 年 12 月初め、米国へ渡った李承晩はワシントンで最高級のカルトンホテルに宿をとった。そのあと、米国における自分の私的代理人ロバート・T・オリバーに電話し、シラキューズ大学の講義を休講し、自分と同行してほしいと誘い出した。かれはほかにも数人のパートナーを引き入れ、数百人の著名な米国人を招いて豪華なパーティーをおこなうことにしたのである。
　李承晩の意図はなんだったろうか？　それは二つであって、一つはホッジ将軍を南朝鮮駐屯米軍司令官職から解任することであり、いま一つは、米軍の朝鮮占領地域で単独政府を樹立することであった。第 1 の目的は完全に失敗した。南朝鮮に単独政府をつくる第 2

の目的は、最初は成功したのか失敗したのか明らかでなかった。わたしを含めて多くの人たちは、国務省がなにも決定していないと主張していたことから、失敗したものと思っていた。李承晩は、南半部での単独選挙にかんする国務省との約束が「自分のポケットにおさまっている」と言っていたが、数か月間はそうした方向の動きが実際上なにも見られなかったのである。それに国務長官ジョージ・C・マーシャルは、中断されている米ソ共同軍事委員会の再会を求める計画であると発表して、観測者たちに、李承晩の主張がひとりよがりにすぎないと思いこませた。ところが、共同委員会の再会を求めるマーシャルの発言は､見せかけのゼスチュアにすぎなかった。その年の秋、米国は南朝鮮での単独選挙を援助するよう国連総会に要求したのである。李承晩のいう成果は誇張されたものではあったが、かれとその追随者が起こした騒動は、そうした決心をとらせるうえで一定の役割を果たしたに違いないのである。

李承晩とその一派は喜んだが、平和的方法による祖国統一を主張する朝鮮人たちは驚いた。単独選挙は必然的に同族相せめぐ戦争が朝鮮の永久分断につらなるものと思ったのである。それは李承晩とその追随者が主張する路線であった。李承晩は軍事的手段による統一を頑固に主張していた。その後に起こった事態の発展は、1948年の単独選挙に反対した人たちの憂慮が正しかったことを証明した。

第 5 章　秘密の戦争

南朝鮮での単独選挙実施に踏み切った米国の決定に、李承晩がどれほど影響をおよぼしたかは明らかでない。しかし、米国にそのような決心をくだすよう執拗に働きかけた李承晩の努力が国務省の決定採択に一定の作用をしたことは事実であろう。冷戦が熱気を帯び、強硬な反共政策の実施を求める共和党の圧力が高まると、トルーマン政府は譲歩せざるをえなかった。それに新任の占領地域問題担当次官補ジョン・H・ヒルドリング少将は、李承晩の見解に共感していた。1948 年 5 月 10 日、朝鮮の米国側地域では、国連の保護のもとに単独選挙が実施され、国会が構成された。国会の課題は憲法を採択し、南朝鮮政府を樹立することであった。ホッジ中将は選挙を全的に支持した。選挙委員会を組織し、軍政の国家警察や民間人まで動員して選挙を推進した。しかし内心は穏やかでなかった。南朝鮮の有力な 3 巨頭のうち二人は、選挙が朝鮮の永久分断ないし戦争につながるものとして、選挙のボイコットを宣言していたのである。ホッジには、3 人のうち、李承晩がもっとも人気のない候補だと思えた。

李承晩博士は、ソウル東大門区で選挙に出馬することを決心した。その決心が公開されると、かれの支持者たちは、同選挙区で李承晩に対抗する候補の出馬はいっさい許せないと警告した。かれらは李承晩が「全員一致」で選ばれるのを望んだのである。しかし選挙区の住民は、それを民主主義を愚弄するものであるとして不満を表明

した。そうした世論にこたえて、米国に留学し大学教授の経歴をもつ崔ヌンジンが出馬を表明した。けれどもかれは、立候補登録の終わる日まで李承晩派無頼漢の脅迫を受けつづけた。登録受付けが終わりかけていたとき、選挙委員会本部に向かっていたかれは、暴漢に襲われ、有権者がサインした立候補申請書を奪われた。選挙委員会は、かれを立候補資格者と認めなかった。

＊ 選挙直後、崔ヌンジンは扇動罪の名で逮捕され、朝鮮戦争勃発後処刑された。

選挙後 2 か月近くで、国会は李承晩がひとりで起草したに等しい憲法草案を採択した。国会はまた、南朝鮮の国号を大韓民国と定めた。小さい国土のそれも半分の土地に建てた国にしては国号が大げさすぎるという一部外国人オブザーバーの論評に、李承晩と国会議員は、「絶対にそうじゃありません。朝鮮の人口の 3 分の 2 がここ南側に住んでいるのですから、われわれは全朝鮮を代表しているのです」と答えた。かれらはまた、大統領の選出を国会でおこなうことに決定した。

憲法の採択についで、1948 年 7 月 19 日、大統領選挙が実施された。李承晩は 100 票中 84 票を得て大統領に選ばれた。選挙をボイコットした金九は 13 票の支持票を得た。米軍政の最高行政官であった安在鴻には 2 票、韓国駐屯米軍司令官の責任顧問徐載弼博士には 1 票が投じられた。

大統領に就任した李承晩は、自分の就任は北進の第一歩を踏みだしたにすぎないと宣言した。

＊　李承晩が大統領に選ばれると、わたしはかれにお祝いの手紙を書いた。李承晩は、1948 年 7 月 23 日の返信で謝意を表し、「あなたはわたしの執務室をご存じでしょう。暇があればお寄りください。喜んでお会いします」とつけ加えた。2 日後、わたしはかれを訪ねた。わたしがいとまごいをしようとして立ちあがると、かれは　「あなたがプリンストンに帰れば、スライ教授にわたしのあいさつを伝えていただけませんか。残念ながら、わたしにはかれに手紙を書くゆとりがありませんでした。これまではそうするほかなかったのです。わたしはたたかいによって一歩一歩あるいてこなければならなかったのです。わたしはまだ、大きなたたかいを目前にひかえているのです（こう言いながらかれは北方を指さした)。そのたたかいが終われば、わたしはかれをここへ招くつもりです」と言った。

かれは当時、すでに北朝鮮にスパイを送りこんでいた。北への奇襲部隊攻撃計画は、その年の秋に起きた麗水と順天の軍騒擾事件のため延期せざるを得なかった。翌年、騒擾がほとんど鎮圧されると、李承晩は軍に、38 度線以北への作戦を推進するよう命じた。

ヘンダーソンの記録

1946 年、朝鮮からの米軍撤退を要求する形でホッジ中将の追放キャンペーンをくりひろげていた李承晩は、兵器と軍資金、軍隊の

訓練問題が浮上すると、たなごころを返したように、自軍の北進準備が完了するまで米軍が南朝鮮に留まってくれるよう要求しだした。そして、米軍将校や政治家たちに北進即時断行の必要性を説くよう、国軍将校に指示した。

ソウル駐在米国大使館書記官であったグレゴリ・ヘンダーソンの記録（1949 年 8 月 26 日）は、朝鮮の武力統一に向けた李承晩のキャンペーンを実証する有力な資料であるといえよう。その全文を引用しょう。

「金ベクイル大領との談話。

8 月 25 日、わたしは韓国陸軍士官学校の校長金ベクイル大領（大佐）、フォートベーニング歩兵学校から帰ったばかりの陸軍士官学校副校長閔ギシク大領、昨年、総司令官を勤めた現陸軍士官学校教練司令官宋ヨチャン大領、韓国軍司令部チョン・ヂュンゴン中領ら韓国軍将校らと一緒に食事をした。

金ベクイル大領は軍内で北進気運が高まっていることを強調した。かれは軍隊の士気、とりわけ新しく組織された部隊の士気が極めて旺盛であるとし、そのような士気は、かれらが統一を成就するために入隊したことに根ざしている、そのような感情をもって 38 度線へ向かったにもかかわらず、数か月塹壕にこもって敵を攻撃することなく防御ばかりしていては、部隊の士気が地に落ちるほかないだろう、と言った。そして、軍の準備を完了するには、まだ 6 か月は訓練しなければならない、とつけ加えた。なんのための準備かということは、みな理解しているようであった。

きびきびしている聡明な若い将校閔ギシク大領は、同僚たちの反応からみて、非公式的なものと思われる、二つの興味ある問題につ

いて語った。『わが軍は北朝鮮を攻撃せず、つねに攻撃を受けている、とよく言われています。これは事実にあいません。ほとんどの場合、わが軍が先に攻撃しており、その攻撃ももっと激しいのです。わが軍のほうが強いと思われます』と。これにたいし、ちょっとした口論があり、頬をふくらます者もいた。閔大領は軍の欠陥についても 2、3 指摘した。『問題は基本となるべき将校たちにあります。兵士のなかには、1 パーセントも忠実でない者はいません。兵士たちはなにも知らないが、なんでも簡単に信じます』」

この記録には、韓国軍の北朝鮮攻撃は北の南朝鮮攻撃よりいっそう多い、南朝鮮軍の将兵は「統一を成就する」ため入隊した、長く待てば待つほどかれらの士気は落ちるだろう、だから 6 か月以内に、行動を開始するための準備をととのえなければならない、という意味が強く示唆されている。将校たちの言いたいことは明らかである。つまり、軍はしばらく後の 1950 年春、進軍命令を受けるというものである。

北進への李承晩の性急な動き

北進を早める李承晩の計画を複雑にしたのは、1950 年 5 月 30 日の国会選挙で、李承晩が惨敗したことであった。李承晩の支持する候補は枕を並べて落選し、北南対話による朝鮮統一の支持者たちが新国会で圧倒的多数を占めた。これは、平壌にとってせっかちに南側と戦う必要のない好ましい理由になったが、李承晩にとっては、自分の時代が過ぎ去りつつあることを告げるきびしい警鐘となった。76 歳の李承晩はとりかえしのつかない政治的惨敗を喫したのである。

1950 年 6 月現在、かれには国内になんの支持基盤もなかった。自分自身が生き残り、北進の夢を実現するために頼るべき相手は米国しかなかった。しかし、トルーマン政府が戦争による朝鮮統一計画の支持をためらっているとき、米国にどれだけの信頼を寄せることができるだろうか。

李承晩が米国の支持がどの程度のものであるかを理解するのに役立ったのは、1949 年 9 月 30 日づけ李承晩の手紙にたいする、かれの米国における代理人ロバート・T・オリバーの同年 10 月 10 日づけ返信であった。

オリバーの返信はつぎのようなものである。

「あなたの 9 月 30 日づけの手紙と、張大使と趙大使に宛てた 9 月 30 日づけ手紙のコピーを注意深く読み、かれらと話し合うためにワシントンにやってまいりました。ここでわたしは、討議された若干の問題について、わたしのもっともたしかな返事をお伝えしたいと思います。

北進問題にかんして、わたしはそれに一理があると思い、また、攻撃は最大の、ときには唯一の防御であるという考えに同意します。しかし、ここにいるわれわれには、いま、そのような攻撃がそしてそのような攻撃について語ることすらが、米国の公式支持と大衆の支持を失い、他の国ぐにでわれわれの地位を弱める結果をまねくであろうことは明らかです。悲しむべきことですが、これは厳然たる事実です。現在、朝鮮、ドイツ、ユーゴスラビアが同様な緊張状態にあり、ギリシアについても同じことがいえます。米国の政界と社会界は、われわれはいかなる侵略の疑いも受けないよう注意しながら、発生するあらゆる出来事の責任をロシアにかぶせるべきだとみ

ています。われわれが 4 年がすぎた今日もひきつづき後退し譲歩をしなければならないことにたいし、あなたが嫌悪感を覚えていることは、われわれもよく承知しており、あなたに共感しています。しかしわたしは、変化が起きてロシアの敗れる日が遠くないと考えています。

わたしは、軍事情勢を展望した論文を書きましたが、それがあなたのお考えと一致するであろうと期待しています。（もし一致するなら）わたしはこの見解を各階層の有力な社会人士に知らせ、雑誌その他の出版物にも紹介すべく全力をつくしましょう。けれども、いま、38 度線以北への攻撃問題をもって、トルーマンやその他の高官に会っても、好ましい結果は得られないだろうと思います。（略）この手紙をお受け取りになる前に、恐らくあなたは米国会における援助案の審議結果を知ることになるでしょう。現状では、この問題は混乱に陥っています。上院ではきょうの午後、本案の通過が見こまれていますが、下院はいかなる決定も来年 1 月まで延期するだろうと思われます。わたしはついいま下院議員リールマンに会いました。かれは、朝鮮を訪問した 5 人の下院議員が明朝集まって、援助案を通過させるには下院の指導部にどのような圧力をかけるべきかを討議することになっていると言いました。リールマンだけがきょう先に帰り、残りの人たちは明朝帰ってくる予定です。かれらはみなりっぱな人たちです。かれらはあなたにたいし、そしてかれらがソウルで見聞したことにたいして深い印象を受けており、あらゆる努力を惜しまないでしょう。

当地にいるわれわれはみな、韓国が北を攻撃すべきでないという見解を変えさせるために努めるでしょう。しかし、そのような見解

が変わる以前に攻撃をはじめたり、またそんな計画があなたにあることを示唆すれば、米国と国連の支持を完全に失う由々しい事態をまねきかねません。他方、もしわれわれが『冷戦』に敗ければ、冷戦は『熱戦』になるほかなく、それが問題を最終的に解決する唯一の方途になりうるでしょう。

最大の謝意と敬意を表します。(略)」

先にも指摘したように、この手紙は 1949 年 9 月 30 日づけ李承晩の手紙にたいする返信である。南朝鮮大統領はオリバーと在米韓国人補佐官たちに手紙で、北への自分の「進攻的措置」にたいして、米国の支援を確保するための努力をいっそう強めるよう、圧力を加えたのであった。李承晩は手紙で、「わたしは、われわれが北の共産軍内にいるわれわれに忠実な軍人たちとともに攻撃を組織し、平壌の残党を掃討するためには、いまが絶好の機会だということを痛切に感じます。われわれは、とるに足りない少数の金日成一派を山地帯に追い出して、そこで、漸次餓死するようにさせ」るであろうと書いた。

オリバーと張、趙両大使は、李承晩の手紙の内容が漏れたら、李承晩が米国の支持を受けられなくなるだろうと驚きあわてた。かれに真実を知らせなければならなかった。李承晩の高ぶった感情をなだめるため、オリバーは、10 月 10 日、かれが米国の支持程度を理解し、自分の目標を実現するよりよい対案、つまり「われわれはいかなる侵略の疑いも受けないよう注意しながら、発生するあらゆる出来事の責任をロシアにかぶせる」方法もあることを暗示する方向で、返信を書いたのである。

オリバーが張、趙両大使だけでなく、米国内の有力な知人とも李

承晩の手紙の内容を討議するためワシントンに行ったことからして、わたしは、北朝鮮征服をはかる李承晩が米国の軍事的支援をとりつけるためには、北が攻撃を仕かけてくるように誘導し、北朝鮮の侵略によって戦争が勃発したと世界に信じこませなければならないというオリバーの勧告に、多くの米国人が同意したものと考えている。李承晩は、米国との公式の、厳格な双務的防衛条約も期待できたであろうが、自分の北進計画の推進に熱をあげていたかれは、かれらの婉曲な勧告をゴー・サインと受け取ったのである。とにかく、かれはいつまでも待つわけにいかなかった。

偶然の一致ではあるが、1950 年は米国で国会選挙がおこなわれる年であった。情勢はあらゆる面で共和党に有利に傾いていた。民主党政権のもとで 17 年間すごした米国人は、それにあきあきし、トルーマン大統領の人気は下落していた。戦後の最初の不況で米国は打撃を受けた。最大の困難は冷戦が熱気を帯びはじめたことであった。トルーマン政府は共産主義にたいし寛大だ、「中国を共産主義者に奪われた」などという共和党の非難にたいし、弁明に汲々としていた。そのような非難は、国務長官アチソンが、1950 年 1 月、全国記者協会で、太平洋における米国の防衛圏から朝鮮と台湾を除く、と演説したことから、いちだんと激しくなった。こうしてトルーマンは、米国の対外政策面における両党間の分裂の深まりを防ぐために行動しなければならなかった。その結果、前にふれたように、ダレスを政府に引き入れたのである。特使の称号を受けたダレスは、対外政策で超党派的雰囲気を醸成し、米日講和条約問題で国務長官に助言を与えることになった。しかしかれは、まるで東アジア担当共同国務長官でもあるかのように行動し、前にも述べたように、い

ちはやく李承晩を抱きこんだのである。

李承晩にたいするかれの積極的かつ強力な支持が分別のあるものだったといえるだろうか？　そう見るべきではない。1945 年、李承晩が朝鮮に帰る前の二人の関係は近いものでなかった。ダレスは朝鮮の他の指導者とは会ったことがなかった。朝鮮を訪れたこともなかった。かれの朝鮮についての知識は、日本人から聞いたこと、すなわち小国朝鮮は中国または日本の植民地であった、ということであった。かれが李承晩について知っていることは、米国にいる李承晩の追随者から、かれが強硬な反共分子であり、朝鮮の指導者のうちもっとも有力な人物であると聞かされていたことであった。ダレスが李承晩を信任するにはそれで十分だった。

北進前夜

統一朝鮮の大統領になるのは、李承晩の平生の夢であった。だからすでに老衰し、夢を実現する機会が過ぎ去りつつあると考えると、いらだたないでいられなかったであろう。そんな矢先に、ダレスが幅広い活動を担当する特使に任命されたのは、かれにとって幸いなことだった。ついにトルーマン政府内に有力な同盟者を得たのである。かれは、共産主義者が政権を固める前に、朝鮮統一の行動を強化するよう補佐官たちに指示した。米国官吏や外国人記者に好印象を与えるため、かれは韓国軍の兵員数を増やし、戦闘力を強めて、万端の戦闘準備をととのえている米軍と同じイメージをもたせようとした。そして、国軍を北へ送りこんで北朝鮮軍を撃破することで国軍の士気を高め、戦闘力を強化しようとした。

北と南のあいだでは、相手側領土への侵入がつづいていたが、ヘンダーソンの記録とロバートの手紙からもわかるように、南朝鮮の北朝鮮攻撃は北からのものよりはるかにひんぱんにおこなわれ、しかも強力であった。実際、1949 年 1 月から 1950 年 6 月 25 日まで、国軍は北側へ 2 千余回もの攻撃を加えている。北朝鮮の一歴史家は、南側がときには数千人の軍隊を投入していたと指摘している。

ここでとくに重要な意味をもつのは、李承晩大統領が米国駐在張勉大使を通じてダレス特使と緊密な連係を保ったことである。両者のもっとも重要な接触は、1950 年 6 月 12 日にあった。

その日、李承晩の緊急指令でダレスを訪ねた張大使は、韓国が重大な危機に直面している、自国の保護を米国が公式に保障してくれるよう強く求めている、という李承晩の依頼を伝えた。

こうして、ダレスは 1950 年 6 月 17 日から 22 日まで、ソウルを緊急訪問することになったのである。

第 6 章　どちらが先に発射したのか？

ダレス特使は張勉大使に会った 2 日後の 1950 年 6 月 14 日、南朝鮮訪問の途についた。ワシントンをあとにするときかれは、その訪問が「状況をじかに把握するためのもので、何事にたいしても交渉する使命はになっていない」と声明した。しかしかれは、米国の対朝鮮政策を「確定」するために行くのだと付言して、訪問の重要性をほのめかした。かれは何人かの国務省官吏とともに南朝鮮大統領との会談、38 度線の視察、南朝鮮国会での演説などのスケジュールを組んでいた。平壌はかれの訪問が、李承晩の北進計画にたいする米国の支持を表明するためのものであると見たし、ワシントンの一部官吏も同じような見解をいだいていた。

ダレスの南朝鮮訪問

ダレスの南朝鮮訪問は、ワシントンとソウルで大きな関心を呼んだ。ダレスが国務省入りすると、ムチョーと張勉大使の非公開の活動が強まり、ワシントンとソウル間の人事往来は著しくひんぱんになった。6 月 17 日、ソウルに到着したダレスは、翌日、米国と南朝鮮の高官を従えて前線を視察し、そのあと満足の意を示した。

19 日、ダレスは南朝鮮国会で演説した。それは、20 世紀における朝鮮の潜在力は 19 世紀に米国が達成した偉大な成果に比肩しうるものである、という激励の演説であった。かれは、米国は世界が

見習うべきモデルを創造した、韓国は 20 世紀にそれと同様なモデルを創造できるであろう、と力説した。そして、「みなさんは孤独でない。みなさんは人間の自由のための偉大な構想を実現するうえで有意義な役割を果たすかぎり、決して孤独ではないだろう」という言葉で、演説を結んだ。

南朝鮮国会におけるかれの演説と境界線一帯の視察については広く報道されたが、かれのもっとも重要なスケジュールであった李承晩大統領との会談内容はいっさい公表されなかった。マスメディアの黙殺にあったのだろうか？　そんなことはまったくありえない。では会談が取り消されたのだろうか？ 会談は明らかに 18 日におこなわれた。それにもかかわらずいっさい報道されなかったのは、それが極秘に付されていたからである。

ところが、李承晩は秘密を守ることができなかった。なぜなら、行動計画は李承晩一人で実行できるはずがなかったからである。ほかの者も知らなければならなかった。会談のおおよその内容をわたしは二人の知人を通して知ることができた。

崔ジェイル記者によれば、李承晩は「中国の共産主義者が権力を固める前に、朝鮮の分断を終わらせなければならない。さもなければ、世界の共産主義者が冷戦で勝利する恐れがある」と主張した。

わたしと親交のあった元国軍中将崔徳新の話によれば、ダレスは李承晩に、共産主義と戦う覚悟ができている国にたいしては、米国がいつでも援助する用意がある、と確言したという。ダレスは 38 度線で深い印象を受けたとし、共産主義の北朝鮮を攻撃する準備ができていれば、米国は国連を通して援助するであろう、とほのめかした。そして、韓国が先に攻撃を受けたと世界に認識させる必要性

を語り、そのように行動計画を立てるよう李承晩に勧告した。

残念ながら、李承晩とダレスの密談の正確な内容を記録した物質的証拠はない。精通した消息といっても、聞き知ったものにすぎないのだ。けれども、トルーマン政府が北への軍事的支配をもくろむ李承晩の目的を公然と支持できなかった事情に照らしてみるとき、そして李承晩の性格や仕事の処理方法からして、かれが米国の軍事的支持を取りつけるための裏工作をし、ダレスが裏門を開けてやった、とみるのは間違いのないことである。だからわたしは、これまで述べた内容を総合したうえで、李承晩の計画が、前にもふれたように甕津の北の防御陣地を 6 時間砲撃し、しばらく休んだあと、6 月 25 日未明、38 度線の全域にわたって大々的な攻撃を加えるという形で実行されたと信じたのである。

不手際に実行された李承晩・ダレス計画

計画の実行は不手際なものであった。

第 1 に、ダレスが多くの軍事および民間の指導者を伴って境界線にあらわれ、望遠鏡などで視察していることを知った北朝鮮の人たちは、国軍の攻撃がありうるとして、警戒心を高めていた。

第 2 に、李承晩は北朝鮮の軍事力をはなはだしく過小評価していた。

北朝鮮安全機関の手にかからなかった李承晩のスパイたちは、かれに事実をありのままに報告するより、かれの気分をよくする情報を伝えることに関心を向けていた。

第 3 に、前にもふれたように、ダレス・李承晩計画は李承晩がそ

れを補佐官にうち明けた瞬間に秘密ではなくなり、やがて北朝鮮も信号を受けることになった。

どちらが先に朝鮮戦争を起こしたかという論点に注意を向けるとき、1950 年 6 月 25 日のソウルと東京での出来事は実に意味深長なものであったといえる。最初、ソウルと東京はともに静寂そのものであった。その日は日曜日で、ほとんどの住民が朝鮮の 38 度線で戦いがはじまったことを知らず、遅くまで寝ていた。ソウルで李承晩は、午前 6 時 30 分、国防部長官からニュースをもたらされたときに目を覚ました。李承晩は「全力をつくして抵抗すること」と穏やかに指示した。その日の朝、大統領官邸は静かだった。いかなる緊急会議も開かれなかったし、駐米大使に援助を要請せよ、という指示も出されなかった。しかし、妻以外には誰にも知られないように、李承晩は東京のマッカーサー将軍に電話で、戦闘の開始を報告し、支援を求めた。

マッカーサーが李承晩の電話を受けたあと、連合軍最高司令部は騒然となった。マッカーサー将軍の高位補佐官たちが緊急会議に呼び集められた。かれらは、朝鮮戦争の勃発そのものより、戦いがどのようにしてはじまったかを知りたがって騒いだ。噂は連合軍最高司令部から東京市内、そしてその他の都市へと急速に広がっていった。どのような噂だったのか？　その日の朝、著名な作家ジョン・ガンサーとその夫人は、二人のマッカーサー補佐官と一緒に日光で観光を楽しんでいた。午前、茶を飲むためホテルに戻ったとき、補佐官の一人に電話がかかってきた。受話器をおいてテーブルに戻ったかれは、興奮をおさえるように静かに言った。「たいへんなニュースだ。南朝鮮が北を攻撃したんだ」と。しかし、ガンサー夫婦が

東京へ戻ったとき、マッカーサー参謀部はかれらに、最初の報道は正確なものでなかったとし、実際は「北朝鮮が南朝鮮を攻撃した」と言うのだった。最初マッカーサーの補佐官が話したことと同じ内容の噂が、その日の午後もひきつづき東京市内に広がっていたことと考えあわせるとき、ガンサーにとってそれが「誤解」だとは到底認めがたかった。その日の夕方近く、東京駐在南朝鮮公使はソウルの大統領官邸に電話をかけ、日本の首都で流れている朝鮮戦争にかんする「極めて不快な噂」を報告した。それを聞いて、大統領は落ち着きを失った。

そんな電話に加えて、前線からのニュースも好ましいものでなかった。かれの側近補佐官は、6 月 25 日の夕刻からは、かれの妻が許すニュースしか李承晩に知らせることができなかった。6 月 26 日月曜日の夕方、李承晩はソウルから逃げ出すことで頭がいっぱいになっていた。同じ夕方、大統領官邸の景武台では、大統領がソウルを捨てる問題をめぐって、李承晩とその側近を一方とし、数人の「老練な政治家」と米国大使ムチョーを他方とする論争が起こり、混乱に陥った。李承晩内閣が緊急閣議を開いていた 6 月 27 日早朝、大統領とその一行は景武台を抜け出し、汽車で南方へ逃げた。李承晩は大田に到着すると、「約束を守ったためしが一度もない」と米国を非難した。

3 日以内に北朝鮮を占領すると豪語しながら、戦況が不利になると真っ先に逃げ出したかれが、そんなことを言うのは、言葉がすぎるのではなかろうか。それは、李承晩・ダレス密約を正しく履行しなかったばかりか、自分が戦争の火をつけたことを認めたものではなかろうか。そして、米国が助けてくれず、戦争で北に敗れれば、

戦犯として処刑されるのでは、と恐怖にかられていたのではなかろうか。

李承晩・ダレス計画の実行で自分の役割をまともに果たさなかったのは李承晩だけでなかった。ダレスも同様であった。

第1に、なぜかれが6月18日、38度線の視察をそれほど公然とおこなったのか、理解できないことである。もしそれが国内でのかれのイメージ・アップをはかるものであったとしたら、成功したといえよう。しかし、かれがそんなふうに境界線にあらわれたため、北朝鮮の人たちはそれを注視し、警戒心を高めたではないか。

第2に、保守的な他のすべての米国人と同様、ダレスもまた、北と南のすべての朝鮮人の李承晩にたいする評判を軽はずみにも過大評価していた。それで戦況が南側に不利になってはじめて、北朝鮮で李承晩があまり歓迎されていなかったことに気づいたダレスは、急いで南朝鮮にたいする米国の公約を確言したのであった。そのとき日本に滞在していたかれは、国務長官アチソンにつぎのような電文を送っている。

「南朝鮮が自力で攻撃を牽制し、撃退することもできる。それはもっとも好ましいことである。しかし、そうできなければわれわれ（ダレスと随員の東アジア担当局長ジョン・M・アリソン）は、韓国が理由のない武装攻撃を受けているあいだ座視すべきでないと信ずる。座視すれば面倒なことがつぎつぎに起こり、世界大戦に発展する恐れがある。われわれは、安全保障理事会が第106条に従って5常任理事国、または喜んで応じる用意のある国を動かして、国際機構を通じた行動を要求できるであろう、と考える」

この電文は重要な意味を持っている。ダレスはここで、朝鮮の戦

いを、北朝鮮が起こした「理由のない武装攻撃」であるとしている。しかし、それが「理由のない武装攻撃」であることをどうして確認したかについては説明されていない。かれは事件の発生当時、朝鮮にいたのではなかった。だからこの電文は、ダレスと李承晩の密議によって戦争が開始されたことを、無意識のうちに認めたことになるのではなかろうか。

ウォーター・ゲイト事件とイラン・コントラ事件を経験した現在では、そうしたワシントン高官の非公開活動は悲劇的なものとみなされたであろう。しかし、そうしたことがほとんど論争の種にならなかった 1950 年代に、国会の舞台裏の計画に従い、米国人が数千マイル先の名前も知らなかった第 3 世界の国の冷酷な独裁者を助けて戦争に参加することになろうとは、誰が想像しえたであろうか。実際、第 2 次世界大戦直後、共産主義にたいして「巻き返し」政策をとるか、「封じ込め」政策をとるかという問題は、ワシントンで熱気ある論争の種となっていた。共産主義と、第 3 世界の民族解放をめざす共産主義運動に対処して、どの政策がもっとも望ましいものかという点で、全国的にはもちろん、国会内でも意見が対立していた。しかし北朝鮮はもちろん、南朝鮮の全人民も一様に李承晩を排斥し朝鮮の平和的統一を望んでいるという事実を前にして、朝鮮で「封じ込め」政策を実施するのは適当でないと見られていた。

こうして、トルーマンの前には、かれの多くの後継者と同様、自党の民主党や国会で見解の一致がなされていない状況のもとで、朝鮮における共産国家の出現にどのような決定的反応を見せればよいか、という問題が提起された。そこで、トルーマンは、共和党の反共勇士ダレスを国務省の当問題担当者に任命し、ダレスと李承晩は

その解答を作成した。その内容は、南朝鮮が北朝鮮の恥知らずな侵略の犠牲になったという口実を構えて、米国が朝鮮で「防御的」な軍事行動に参加するというものであった。とりわけ、戦争を「多国籍警察行動」で粉飾することができるなら、米国がそのような国連の活動を積極的に支持したとしても、誰が反対できようか？

北への攻撃を熱望してやまなかった李承晩は、ダレス・李承晩協定の実現に乗り出した。かれの指示で国軍将校は急ぎ行動を開始した。しかし、李承晩政権内にいた共産党秘密要員の通報と、そしてダレスの不審な境界線視察に警戒心を高めていた北朝鮮軍は、李承晩の攻撃に対処して万端の準備をととのえていた。わたしが会った北朝鮮老兵たちの話によれば、李承晩の戦略は甕津の精鋭部隊が北側の戦略的重要都市海州に強打を加える一方、38 度線の中部および東部戦線で朝鮮人民軍を釘づけにすることであった。そのため国軍は、1950 年 6 月 23 日夜、開城地方で北に向け大々的な砲撃をおこなった。砲撃は 6 時間つづいたが、海州に近い甕津の朝鮮人民軍防御陣地を破壊することはできなかった。

韓国軍は莫大な人命の損失を出しながらも、海州市に一時突入することに成功した。朝鮮人民軍は、6 月 25 日朝、反攻撃を開始した。もし李承晩軍が海州近くで北朝鮮軍を撃滅して都市を占領していたなら、国軍はソウルに通ずる中部戦線で朝鮮人民軍を包囲することが可能であったろう。結局、李承晩はダレス・李承晩密約をたのんで朝鮮戦争を引き起こしたが、二人がともに失策をおかして、結局目的を果たせなかったのである。

ワシントンの対策

最初､西側諸国は朝鮮戦争の開始にたいし見解を同じくしていた。それは膨張主義的なスターリンの指示で共産主義の北朝鮮が侵略をはじめたというものであった。非共産世界の出版物は米国の主張をうのみにする社・論説を書いた。1 常任理事国の棄権があっただけで、国連安全保障理事会は、北朝鮮軍が軍事行動を中止して、38 度線の北にある自分の陣地に帰ることを要求する決議案を採択した。ジョージ・F・ケナンのように有能な学者政治家でさえ、最初開戦のニュースを聞いたとき、当時の支配的見解に疑念をさしはさむ根拠を見いだせなかった。かれは回顧録でこう書いている。「この攻撃を退けて北朝鮮の武力を南半部から駆逐するため、われわれは必要なすべての力を動員しなければならない、とわたしは明らかに感じた」

この見解を信じなかった唯一の人物は、I・F・ストーンという優秀な記者であった。かれはせっかちな判断をくだすべきでないと主張した。かれは、1970 年代末、わたしと昼食をともにしながらその理由を語った。かれは金日成のことはもちろん、朝鮮についても知ることがほとんどなかったと認めながら、それでもソ連とスターリンについてはよく知っている、と言うのであった。スターリンは帝国主義の敵ではあったが、ソ連が第 2 次世界大戦で極めて大きい人的・物的被害を受けたため、かれが暗愚でない以上、米国に挑戦するはずがない、というのである。実際、スターリンはヒトラーのような無謀なかけごと師ではなかった。このように北朝鮮は、ソ連の全面的な支援なしには米国に支えられている南朝鮮に勝てる

はずがなく、それが誰の目にも明らかであったにもかかわらず、なぜそのような曖昧な主張が圧倒的な優勢を占めたのだろうか？

ともかく米国は、共産主義の北朝鮮がスターリン主義的ロシアの指示を受け、米国が東アジアに建てた民主主義の標本韓国を侵略した、と世界に信じこませようとして全力をつくした。米国はいろいろと術策を弄した。北の侵略を証明する物語や写真を雑誌に載せたり、そうした主張を裏づける「文章」を出版したりした。米国は、李承晩大統領が、1949 年 9 月 30 日に米国にいる代理人のオリバーに宛てた手紙の真実性を否認しようとさえした。その手紙の一部をここに抜粋してみよう。

「わたしは、われわれが北の共産軍内にいる、われわれに忠実な軍人たちとともに攻撃を組織し平壌の残党を掃討するためには、いまが絶好の機会だということを痛切に感じます。われわれは、とるに足りない少数の金日成一派を山地帯に追い出して、そこで、漸次餓死するようにさせ、そのつぎには、われわれの防御線を鴨緑江と豆満江にかけて増強しなければなりません」

いま一つの例をとれば、当時の新しい大衆雑誌『リポーター』は、1950 年 9 月 20 日号に扇動的な戯画を掲載した。大男のロシア将校「カリノフ大佐」が小男の北朝鮮人たちを火を噴いている朝鮮戦場に投げこむ場面である。カリノフは架空の名である。説明文は米ＣＩＡの手になるものであった。雑誌はその後いくらもたたずに廃刊になった。

北朝鮮の有罪を証明するため米国がもっとも力を入れたキャンペーンは、「鹵獲文書」の公表であった。1951 年 5 月 2 日、国連駐在米国代表ワレン・Ｒ・オースチンは、朝鮮駐屯国連軍司令官リッジ

ウェーがリー国連事務総長に送る特別報告を伝えた。そこには、北朝鮮軍から奪ったという 2 通の文書が同封されていた。偵察命令第 1 号という最初の文書は、国連軍がソウル市に突入した 1950 年 10 月 4 日に発見されたもので、1950 年 6 月 18 日、北朝鮮軍諜報機関責任者が北朝鮮軍第四歩兵師団長に送ったものとされている。1950 年 6 月 22 日づけの作戦命令第 1 号という第 2 の文書は、1950 年 7 月 20 日、大田付近で獲得したもので、北朝鮮軍第 4 歩兵師団長李クォンムが作成したという。リッジウェー将軍は、朝鮮語で書かれた 2 通の原本は米国政府のもとにあるとしている。

リッジウェーは、1950 年 6 月 18 日と 6 月 22 日にそれぞれ北朝鮮軍部隊に下達されたこの 2 通の文書が、1950 年 6 月 25 日に開始された韓国「侵略」が韓国を転覆するための意図的な事前計画にもとづいて綿密に準備され、行動に移されたことを示す「明白な文献的証拠」であると強調している。

文書は本物か？

しかし、それらの文書を吟味すると、その信憑性より、理解できない点の多いことがわかるのである。

国連軍司令官は、それらの文書が北朝鮮軍の指揮者たちによって綿密に準備されたものだと公言しているが、その実際の作成者が果たして誰であるかは疑わしい。例えば偵察命令第 2 号を詳しく見てみよう。

前に指摘したように、リッジウェーは鹵獲文書の英語翻訳文を国連に提出し、原本は朝鮮語であると書いている。そのしばらくあと

で北朝鮮の人たちは、朝鮮の地名にかんする「原本」の英語発音、とくに偵察命令第 1 号の英語発音が日本語読みにもとづいていることをもって、それらの文書はいかものであると論じはじめた。朝鮮の固有語を日本語読みにもとづいて発音するのは、朝鮮民主主義人民共和国では、1947 年に非合法化されたという。1 か月後、国連駐在米国代表グロスは、北朝鮮側の主張を退け、偵察命令の「原本」は間違いなく朝鮮語で書かれているが、実際に鹵獲した文書は朝鮮文の原本をロシア語で翻訳したものであることを「明らかにした」。

ロシア語に翻訳したのは、偵察命令を「朝鮮語をよく知らないロシア語に精通した人」に理解させるためであった、というのである。そしてかれは、朝鮮語をロシア語に訳した人が朝鮮の都市名を日本語読みで表現したのは、ロシア人がそれに習慣づけられているからだと主張した。

もちろん、かれの説明が正しいかどうかは、かれが朝鮮語で正確に地名を表記した朝鮮語の原本を提出できるか、どうかにかかっていた。しかしかれは、そのような原本については一言もふれていない。

かれは、ロシア語版は「朝鮮語を訳したもの」だと説明しているが、朝鮮語版がない以上、文書が韓国軍によって偽造されたと信ずる可能性は大きくなるのである。なぜなら、韓国軍人も当時ロシア人のように、朝鮮の地名を日本語読みで表記することに習慣づけられていたからである。より重要な点は、米国が鹵獲したという文書（ロシア語の偵察命令第 1 号）の公開を求める学者たちに、それを見せることができないでいることである。したがって、北朝鮮が南朝鮮を侵略したと頭から信じている人たちだけが、鹵獲したというその文書を本物と思っているにすぎない、とわたしは考えるのである。

第７章　非難合戦に終止符を打つときはきた

ワシントンと平壌の非難合戦に終止符をうつときはきた。米国と、そして数度の訪問を通して観察した北朝鮮にたいするわたしの見解によれば、非難合戦は米国と朝鮮のすべての人たちに逆効果をおよぼすだけだと確言できる。最近の平壌訪問時、北朝鮮のある人がわたしに、「朝鮮戦争中、アメリカ帝国主義者が李承晩をほとんど死ぬにまかせたという話を聞いたことがあります。李承晩は逆賊ですから、わたしはとりたてて衝撃を受けませんでした。ところで、米ＣＩＡがバッファロー（野牛）という暗号名で呼ばれているチェロキー・インディアンを買収し、金日成主席の暗殺をはかったと聞いて、憤りをおさえることができませんでした。米国人はどうしてそんなにも野蛮な人間たちなんでしょうか」と言った。

わたしは、そうした企図があったことを知っていると肯定した。そして、われわれの偉大な指導者の一人である金九を射殺したのは、南の朝鮮人であることを思い起こさせ、「殺害者が朝鮮同胞の一人であったことを思えば、地球上のすべての人間が一定の状況のもとでは、そんな残虐行為を働きうることを物語っているのではないでしょうか？」と言った。かれはうなずき、「わたしは南朝鮮と北朝鮮、米国人たちがりっぱな隣人として生きることを学ぶよう望んでいます」と答えた。

わたしたちは、互いにそうした目的を実現するために努力しようと確認しあった。

わたしが米国から来、ほぼ 50 年間そこに住んでいることを知ったわたしの新しいその友人は、米国と米国人についてのわたしの考え方を知りたがった。わたしは、米国や米国人も他の国や他の国の人たちと違うところはあまりない、と答えた。そして、かれが米国や米国人について悪い面ばかり聞いてきたのだろうと考え、二つの例をあげて、かれらをたたえるにあたいする点を語った。一つは、1930 年代の大恐慌時、あの困難ななかで発揮された米国の雅量についての話である。そのとき米国政府は、米国住民の 4 分の 1 に近い人たちが職を失い、毎年数十万にのぼる銀行と企業が破産していた実情を考慮し、飢えている米国人にたとえいくらかの職場でも与えようとして、在米外国人大学生の臨時雇用を許さないという方針を決めた。労働長官ドーク・ルーリングがこの決定を発表すると、米国のすべての単科および総合大学の学長が、それは米国らしくない冷酷な処置であるとして、猛烈に抗議した。政府は方針を撤回しなければならなかった。その決定が実行されていたとしたら、わたしもまた大学を追われるほかなかったであろう、と。

いま一つの実例は、わたしが第 2 次世界大戦中に体験したことである。プリンストン大学の研究生であったわたしは、米国戦争公報・検閲所の諮問メンバーとして、政府に雇われていた。わたしは仕事に追われていたが、民間組織や雑誌社から求められる朝鮮問題についての対話や協議の招請を受けると、できるだけ欠かさず応じることにしていた。そうしたなかでわたしは、大学とプリンストン市の多くの著名な人士と知り合うようになった。朝鮮の前途については、わたしの聴衆すべてが第 2 次世界大戦後、朝鮮はただちに独立すべきであると首肯した。そこで、そうした見解を宣伝する委員会をつ

くりたいと提案すると、かれらは即座に賛成してくれた。こうしてフーバー大統領の元顧問ウィリアム・スター・マイアズ教授を委員長とする自由朝鮮プリンストン委員会が組織された。メンバーにはプリンストン大学大学院学部長ルーザ・Ｐ・アイゼンハート教授、米国憲法の権威者エドワード・Ｓ・コーウィン、ニューヨーク市検査官ジョセフ・Ｄ・メックゴルドリック、エルミラ銀行総裁M・Ｄ・トンプソン（エルミラ銀行の創始者は、朝鮮の雲山鉱業会社の経営者であった）であった。アルベルト・アインシュタイン教授は名誉会員であった。世界情勢について幅広い見解を代弁するかれらは、米国人が朝鮮にたいして見解を同じくしていると確信していた。多くの人たちは、世界の平和と繁栄が有力な領土を持ついくつかの大国にのみ依存すべきであるとする単純な見方をあざ笑っていた。かれらは、領土の大小や軍事力の強弱にかかわりなく、すべての国が同等の自主権と独立の権利を有しているが、それは、すべての人間が同等の生存権と自由・幸福追求の権利を有していることと同じことであると信じていた。

アインシュタイン教授はそうした見解の顕著な代弁者であった。1955 年にわたしが最後に会ったとき、その著名な科学者は、自分の見るところでは米国が国連を自己の利害に即して操っているようだと言った。そして、国際機構の国連が大国に利用され、小国を犠牲にしているのだ、とつけ加えた。かれはわたしに、ストーンの『秘史朝鮮戦争』を読んだかと聞いた。読んだ、りっぱな本だ、と答えると、かれは喜んだ。そして、大国は事実にもとづいて行動しているのではなく、自己の目的にあわせて事実を捏造し、小国に自分たちの意思を強要している、と言うのであった。

アインシュタイン博士は、世界平和は大国がどのように見ようとも事実をありのままに見て平和を支持している世界の一般的人民の意思にかかっていると強調した。そして、李承晩大統領と金日成首相はどのような人たちか、とわたしにたずねた。李承晩博士については、長年かれと緊密な関係にあったので、説明に困らなかった。金日成首相については、当時は知っていることが極めて少なかったので、つぎに会うまで待ってほしいというほかなかった。

こうした逸話を通して、たとえ敵対関係にある時期とはいえ、わたしは朝鮮人と米国人が友人になれるという見解を、北の友人たちとともにしたかった。

しかし、こうした親善がなりたつためには、双方がともに相手をより正しく理解しなければならないであろう。いまも米国人は、北朝鮮の金日成主席について知ることがほとんどない。あるとすれば、ワシントンが宣伝しているものだけである。米国人は、41 年前に、理由もわからずに朝鮮と戦った。

あの戦争の原因を知らないでいたら、また戦いに出かけないともかぎらないのだ。金日成主席の生涯と著作は本論文のテーマではない。けれどもわたしは、無知のベールをはらいのけ、論戦を終わらせることに役立てば幸いであると念じて、金日成主席がワシントンやソウルで語られているのとは、実際にどんなに違った方であるかを物語る一つの記録を紹介しよう。それは、戦争中に北朝鮮駐在中国大使が書いた回顧録の一部である。

1950 年 9 月中旬、国連軍が国境沿線の鴨緑江に向けて進撃していたとき、中国総理周恩来は通訳一人を伴ってソ連を訪れた。目的は、中国が朝鮮民主主義人民共和国を支持して朝鮮戦争への参加を

決めたことをスターリンに説明し、クレムリンの財政的・物質的援助を得ることであった。ソ連の指導者が黒海の海岸で休息していたため、スターリン・周恩来会談は、ソ連指導者の海岸避暑地でおこなわれた。周恩来総理はスターリンに、中国政府が中国国境近くへの国連軍の進出を防ぎ、東アジアの平和を保障するため、北朝鮮の側に立って参戦することにした、と伝えた。周恩来は、中国が国民党を敗北させてまもないため、ソ連の同志たちの援助を切実に必要としていると説明した。中国はとくに弾薬、飛行機、資金、運輸手段を必要としていたのである。

スターリンの反応は相手を失望させた。かれはとくに、米軍の大々的な仁川上陸を考慮するとき、中国の朝鮮戦争参加が第3次世界大戦を誘発しないだろうか、と懸念した。かれは、ソ連が第2次世界大戦の結果、人力も経済的資源も枯渇していると説明し、周恩来の要請に応ずるにはどうすればよいだろうかと首を振った。そして、金日成が朝鮮から押し出される場合、中国東北部のどこかに亡命政府を立てて遊撃戦を展開するようにするのがよくはなかろうかと言った。

周恩来が帰国すると、毛沢東は、10 月 13 日、党および政府高位指導者の緊急会議を開いて周恩来の報告を聞き、中国のとるべき態度を討議した。そして十分に討議をつくした末、義勇軍を送って朝鮮民主主義人民共和国軍を助けるのが、兄弟的朝鮮だけでなく、中国とアジアひいては世界の利益にかなうことになると、一致して認めた。中国が北朝鮮を助けず、敵が鴨緑江にいたれば、国内と世界の反動勢力が力を得て、中華人民共和国に反対して、暴動を起こすであろう。とくに、中国東北部が脅威にさらされるのは必至であり、

人民軍はその地域で動きがとれなくなる。それに中国は満州で生産される、中国の死活にかかわる緊要な電力の供給をうち切られるであろう。中国には朝鮮民主主義人民共和国を軍事的に援助するほかに他の道はない。そうして得る中国のメリットは、ありうる犠牲をはるかに上まわるであろう。

このように、中国は米国の強大な軍事力に対抗して、しかもソ連の援助がなくても国際的連帯の任務を果たすべく、北朝鮮の支援へと踏み切ったのである。10 月 18 日、毛沢東は朝鮮民主主義人民共和国駐在中国大使倪志亮に電報を送り、中国義勇軍の派遣決定を金日成首相に伝えるよう指示した。

その晩、倪志亮大使とその後任の潘自力は平壌の夜道を急ぎ、金日成首相の司令部へ駆けつけた。司令部は牡丹峰山麓の地下シェルターにあった。出入口は偽装され、両側には砂袋が積まれてあった。中国の使者は壕内に入り、廊下を進んだ。坑道の奥に照明の明るい大ホールがあり、首相の執務室はその一隅にあった。

首相はかれらが執務室に入ってきたことにも気がつかず、ある人と真剣な表情で話しこんでいた。中国の使者は、二人の会話を中断させるべきか、室外に出るべきかと迷った。

金日成首相の話相手は、当時北朝鮮の副首相兼外相の朴憲永だった。かれは南朝鮮労働党の元党首であった。

朴憲永が執務室を去ったあとはじめて、金日成首相は中国の使者に気づき、喜んで迎えた。首相は重々しい表情で、「おかしな人だ。かれは、敵との戦いをつづけるため山間地帯に後退しようという意見に反対している」と、さきほどの論争の内容を話してくれた。

3 人はすぐ椅子に腰をおろした。倪志亮大使は、北朝鮮への義勇

軍派遣を準備していることを金日成首相に知らせるように、という毛沢東の電文を伝えた。金日成首相は喜んで「それはよいことだ」と言った。金日成は中国の使者に、毛沢東主席とその同僚たちに感謝を伝えてほしいと頼んだあと、朝鮮民主主義人民共和国の人民はかれらの信頼に最善をつくしてこたえるであろうと確言した。

ついで、中国外交官たちを会議場に案内した金日成首相は、盆の上の酒瓶をとり、三つの杯に酒をついだ。そして一人一人に杯を勧め、「われわれの共同の勝利のために乾杯しましょう」と言った。中国大使は、ふだんめったに物に動じない人として知られていたが、感情の高ぶりをおさえることができなかった。かれは杯をとり、「かつてわれわれ中国人と朝鮮人は力を合わせて日本人と戦い、勝利しました。今度もわれわれは、ともに肩を組んで米国を打ち敗るまで戦うでしょう。勝利のために杯をほします」と言った。

以上の事実は、スターリンが金日成に指示して朝鮮戦争を起こしたというワシントンの主張を退け、ソ連の統治者にはそんな意向すらなかったことを語っている。3 人の共産主義指導者、スターリンと毛沢東、金日成の関係は明らかにピラミッド的関係ではなかった。かれらはそれぞれ、自国にもっとも有利に行動したのである。

金日成は、米国の支援を受ける李承晩が北を攻撃したため、戦わざるをえなかった。中国の参戦と関連してソ連に援助を要請した毛沢東の電報が最近発見された（『ニューヨーク・タイムズ』1992 年 2 月 26 日）が、それはたしかに、中国の役割をも含めて戦争がスターリンの企図によるものであったという、ワシントンの主張が完全な誤りであることを納得させるであろう。毛沢東の場合も、国連軍のために北朝鮮が敗亡すれば、つぎは中華人民共和国が脅かさ

れるであろうと判断して参戦したのである。実際、ソ連は北朝鮮にいくらかの援助を与えはしたが、それはソ連が朝鮮民主主義人民共和国の樹立を助けた関係上、朝鮮の防衛に力を貸さなければならないという義務感にもとづくものであった。

つぎに、上にふれた金日成と朴憲永の論争をとおして、金日成は決して無責任な日和見主義者ではなく、確固とした意志の持ち主であることを知ることができよう。戦争が不利になると、朴憲永は降伏を主張し、敵の慈悲心に朝鮮をゆだねるべきだと要求したが、金日成は断固として降伏を退け、必要ならば北部山岳地帯に後退して最後まで戦うことを主張した。

もし、米国が上に指摘した事実、つまり、スターリンは朝鮮戦争を指示しなかったこと、朝鮮民主主義人民共和国への米国と韓国の侵攻に、中国は座視しないであろうこと、金日成が朝鮮の統一を決心し、すべての国と親善関係を結んでいる信頼すべき徹底した民族主義者であることなどを理解していたとしたら、あのような無謀な行動を起こしたであろうか？

30 年以上李承晩との交際があり、第 2 次世界大戦中はとくに密接な関係にあったため、わたしはかれのことをよく知っている。過度のエゴイストであったかれは、自分の意思を朝鮮にたいする「愛国主義」と同一視していた。第 2 次世界大戦後、ソウルに帰ったかれはただちに、一つの問題つまり、北朝鮮を征服して朝鮮を統一するという目標をかかげ、大統領選挙にのぞんだ。かれの目標が米国の冷戦政策と軌を一にしていたことから、李承晩は米国の「寵児」となり、選挙で勝者となることができた。しかし、かれは必要な手段、金も兵器も不足していたため、1950 年初まであえて北進を断

行できなかった。

金日成も李承晩と似たような立場にあった。かれは、軍事的、経済的に準備がととのっていなかったし、ソ連と中国も戦争に対処する準備ができていなかった。それに金日成は、朝鮮人民が平和的統一を望んでいることを知りすぎるほどよく知っていた。それにまだ若くもあったので、急いで軍事的冒険をする必要性を認めていなかった、とわたしは信じている。そのような状況で、金日成が侵略の道を選びえたであろうか？　多くの米国人の見解とは異なり、かれは人一倍理性的であった。それは現在も同様である。そのことは、かれが攻撃を受けて滅亡するような人物では決してないことを語っている。歴史が示したように、かれは敗れなかった。

米国人が金日成と北朝鮮のことをなんと考えようと、米国が金日成を理性に欠けた無謀な指導者であるとして、ひきつづき北朝鮮を孤立させるのは無益なことである。わたしはなによりも、かれが米国と恒久平和を交渉しうる意志と理解力をそなえた確固とした民族主義者であると考えている。論戦に終止符を打つときはきた。

む　す　び

1945 年に南朝鮮のすべての民族指導者のうち、李承晩ひとりが軍事的手段による統一を主張した。李承晩の主張が優勢になったのは、かれが朝鮮人のなかで普遍的な支持を得たからでも、北朝鮮に「不合理な」指導部がつくられたからでもない。それは、ワシントンが「ソ連の脅威」を除くための努力の一環として、かれを支持したからである。李承晩の軍国主義に目をつけ、かれと共謀して、1950 年 6 月、北朝鮮の南進を誘導したのはほかでもなく、共産主義にたいする「巻き返し」を熱心に主張したダレスであった。

わたしはつぎのような結論に到達した。

1、米国は朝鮮と朝鮮人を理解せずに朝鮮問題に介入した。米国は日本の敗亡につづく冷戦の開始と関連し、朝鮮を共産主義者に奪われるべきではないという判断のもとにそうしたのである。

2、米国は、朝鮮人には自治能力がないこと、したがって自治政府の樹立に向けてかれらを準備させる責任が米国にあるものと断定した。

3、朝鮮南半部の占領後、米国は右翼単独政府の樹立に主導的役割を果たしたし、その国にたいする軍事的統帥権と政治的影響力を

いまなお行使している。

4、米国の官吏が韓国における「民主主義づくり」と関連して、多くの努力を傾けたが、南朝鮮は 1960～1961 年の短い期間を除いて、依然として独裁国家でありつづけている。

5、米国は朝鮮半島を「戦争でも平和でもない状態」におくことによって、世界のほとんどすべての地域で消滅しつつある冷戦を、この地域でだけ継続させていることの責任をとるべきである。

6、米軍 4 万人の南朝鮮駐屯は、毎年数十億ドルの消費を余儀なくさせ、対外的には時代錯誤的かつ帝国主義的存在としての米国のイメージを強める結果をまねいている。

7、北と南の朝鮮人民は、朝鮮停戦協定を恒久的な平和協定に変えることを望んでいるが、米国と韓国政府は北を信頼できないと執拗に宣伝している。

わたしは、米国が朝鮮に介入して 45 年たった今日、米国人が、朝鮮人民は分割の許されない一つの民族であり、ジョンソン政府の強要で南朝鮮がベトナム戦争に介入したこと以外に、朝鮮民族が海外侵略の道を歩んだ例がないことを認識することが大切であると考える。朝鮮人民は民族性が強く、いずれ自国を両断している障壁を崩さずにはおかないであろう。朝鮮人民は、自国の統一偉業を支持するすべての民族を友好的に対している。米国人民は民族の自主権

をめざしてたたかう朝鮮人民の側に立つのか、それとも新しい戦争の危険をおかしてまで、現状維持をつづけるのか、いずれかを選ぶべきである。

朝鮮に不安定な停戦ではなく、平和が定着するようにしよう。朝鮮ですべての外国軍と核兵器庫をなくそう。朝鮮が自国の軍備をただ防衛に十分な最低の水準に縮小するようにしよう。朝鮮が平和的に、そして米国を含むすべての国との親善をはかりつつ、一つに統一されるようにしよう。

絶対に新しい朝鮮戦争が起こらないようにしよう。

印刷＝朝鮮民主主義人民共和国

ㄱ-30686